

# 障害者の社会参加を支援する ボランティア・市民活動

ボランティア・市民活動の取り組みが広がる中で、その活動内容も分野も多岐にわたっています。今回の特集は、障害者支援の中でも、障害者の社会参加を応援する事例を紹介し、具体的なプログラム内容と活動を行ううえでの留意点や課題点についてまとめてみました。

## 視覚障害者宅を訪問し、パソコン支援

**全国視覚障害者インターネット接続支援連絡会**（本部/兵庫県神戸市）  
http://asv.jp.org/index.htm

### 音声ソフトの初期設定をお手伝い

パソコンの普及にともない、ソフト開発も急速に進む中、パソコン画面上のテキストデータを読み上げる「音声ソフト」が出現し、視覚障害者も読み書きができるようになり、インターネットを遊泳したり、電子メールを交換するなど、情報を受け取り、発信することが可能となった。

全国視覚障害者インターネット接続支援連絡会（以下、ASV）は、視覚障害者を対象に、パソコンにそれら音声ソフトを導入し、接続設定のサポートを行うことを目的に平成9年に結成された。ホームページ上でメンバーを募集し、翌年から本格的な活動を開始。現在は関西地区のほか、関東地区にも拠点を設け、全国に約80名の会員が参加し活動を行っている。



昨年12月に行った「オープンサポート」の様子

### 視覚障害者のニーズに応えるきめ細かいサポート活動

ASVが行っている主な活動をここで紹介する。

#### （１）訪問サポート

ボランティア2名1組でユーザー（視覚障害者）宅を訪問し、インターネット接続や音声ソフトのセットアップを行うもの。ボランティアのほとんどが就労者のため、出勤は主に土曜・日曜が原則。これまでの総訪問回数は延べ256回（144人）にのぼり、昨年11月にはこれらノウハウをまとめた書籍も出版。

#### （２）オープンサポート活動

関東・関西の両地区で開催する同講習会ではマニュアルテキストを使用せず、「ユーザーの知りたいことに答えていこう」をモットーに、「パソコンで何ができる」というレベルから、特定のソフトウェアの操作方法、トラブル対応をサポート。また、一般の講習会とは違い、毎回3、4名の参加ユーザーに対し、ボランティアがマンツーマン

ンでサポートを行っている。

#### （３）メールサポート活動

これまでサポートしたユーザーを中心に、ASVのメールアドレスに寄せられた質問に回答。半年で約40通程度の質問が寄せられている。



これまでの活動で得たノウハウをまとめて本にしました！

### 「まるで翼が生えたようだ」と喜ぶユーザーの声

ASVでは活動を行ううえでの留意点として、V参加については、活動の中心がユーザー宅への訪問であるため、原則として18歳以上のうえ、必ずアンケートを実施し、回答のあった方へのみの採用としている。

実際にパソコン操作ができるようになったユーザーからは、「まるで翼が生えたようだ」「これをきっかけに、社会参加していきたい」など、これまで晴眼者に頼らなければならなかった情報の収集や発信を自由に行えることの喜びの声が寄せられている。また、ボランティアの多くは就労者で、かつ、V初心者だが、ふだんの技術が職場以外にも役立つうえ、こうした声に励まされ活動に取り組んでいる。

### 地域のボランティアと連携して、 全国のニーズに応えたい

**全国視覚障害者インターネット接続支援連絡会**  
関東リーダー・宮尾 勝さん



ASVでは「ユーザーの環境に合わせたサポート」を最大の特徴として、それを活かせるように運営を行っています。例えば、同じソフトウェアを動かすのにも、デスクトップ型、ノート型など様々な形式があるし、環境設定も違います。また、「自宅訪問」からスタートした組織なので、「ボランティアの都合や環境で覚えてもらう」のではなく、なるべくユーザーの環境に近いところでサポートしています。

パソコンを使用できるようになるためには、2つのハードルがあります。1つは、操作方法を自ら覚えるハードル。2つ目は、パソコンを使用できるように設定しなければならないというハードルです。この2つ目をサポートする組織は意外に少なく、「操作は教わったけど、自宅使えない」という状況におかれてしまう視覚障害者

## 障害者が障害者の自立を支援する

**特定非営利活動法人 神奈川県障害者自立生活支援センター**（神奈川県厚木市）  
http://www1.newweb.ne.jp/wb/kilc/index2.htm

### 国際障害者年をきっかけに、障害者自立の機運が生まれる

昭和51年に提唱された「としび運動」に見られるように、神奈川県では以前から、福祉への市民参加が活発に行われてきた。さらに、昭和56年の「国際障害者年」をきっかけに、障害当事者の「自立」をめざして、当事者や家族、社協Vセンター、有識者が協働でセミナーを実施したり、障害者運動団体連絡会を発足するなど、当事者自身による社会参加の機運が生まれてきた。

平成6年、県は「障害者の地域生活支援に関する研究会」を設置し、「障害があっても、地域で生活できる」ための具体的な支援策を検討。その研究報告を得て、平成9年4月、「神奈川県障害者自立生活支援センター」（以下、KILC）が開設。こうして、県の支援のもと、当事者が中心となって運営し、当事者の自立をサポートする活動がスタートした。



商店街を舞台に福祉イベントを行いました（平塚市）

### 県センターと地域センターで役割分担

障害者に接し、自立支援を直接的に行っているのが、県内12カ所に設置されている地域センターである。地域センターでは、重度な肢体障害者や知的障害者の自立生活に向けた技能訓練や介助サービスのほか、当事者やその家族からの相談に応える「ピアカウンセリング」が主な取り組みとなっている。

「一人暮らしをしたいが、障害者でも入居できるアパートを探してほしい」などの自立生活希望から、「車いすで行ける歯医者」「福祉機器の使い方」などの日常生活情報、「友だちとの出会いの場」や「交通・社会制度」に関する相談など実に様々。しかし、相談者にとって何よりも心強いのは、カウンセラー自身も当事者として、「同じ立場」から課題解決への支援を行っていることである。

一方、県域センターであるKILCでは、「自立生活プログラム」の開発をはじめ、障害者だけでなく市民への意識向上をめざした「各種セミナー」やピアカウンセラーなど人材育成のための「リーダー養成講座」の実施、社会制度や行政サービスなどの「情報収集・提供」など、地

の皆さんには本当に喜んでいただき、また頼りにして頂いています。

運営にあたっての課題は様々ありますが、最大の懸案は、「サポートできない地域のユーザーにどう対応するのか」です。現在、関東・関西の2地区に拠点を持っていますが、全国から寄せられる依頼の全てに応えられるわけではありません。私たちの最終的な目標は、全国のユーザーさんが安心してパソコンを楽しめる環境を作ることですから、今後は、地域で活動しているボランティアと連携して、このサポートを充実していきたいと考えています。

域センターのさらなる拡充と障害者の自立に向けた社会基盤づくりの役割を担っている。

またKILCだけではなく、かながわVセンターでも、障害者を含めたセルフヘルプ活動を進めるために、4月からセルフヘルプコーナーやピアサポート、相談室の設置に取り組む予定だ。

### ボランティアと協働で福祉イベントを開催

一昨年、KILCは県の委託を受けて「神奈川バリアフリーガイドブック」を作成。これは、県内各市町村の飲食店やレジャー・観光施設を、当事者の立場から調査した事業だが、調査にあたって、当事者と地域の福祉・Vグループが集まり「バリアフリー探偵団」を結成。

探偵団は、調査を進める一方で、各地域の商店街と協働で福祉イベントを実施。当日は、車いす体験や手話コーナー、紙芝居やダンスコーナー、作業所商品販売など、地域の子どもたちから高齢者も参加し、障害者との交流を行った。

これをきっかけに、KILCでは各Vセンターをはじめ、地域のボランティア・Vグループとの連携をさらに深め、当事者だけの取り組みから市民参加のプログラム開発も視野に入れた事業展開を行っていく予定だ。

### 受身の立場から、参加の意識へ

**神奈川県障害者自立生活支援センター**  
事務局長・鈴木治郎さん



KILCと地域センターを合わせて、県内センターでは約30名の重度障害者が職員として勤務しています。「ピアカウンセラーは、障害が重ければ重いほど効果がある」とよく言われますが、私たち当事者は、相談に来られる当事者の「自己選択・自己決定」を理念に、障害の専門家としてそれぞれの活動を行っています。

近年、「ノーマライゼーション」の考え方が社会的に普及しはじめてきました。しかし、例えば情報提供に関して言うと、一般的に「良い情報」は入ってきますが、「車いすで行ける夜の店」など「アンダーグラウンドな情報」は、障害者には入ってきません。本当の自立をめざすのなら、障害者が取捨選択できる多様な情報・価値観を提供することも必要だと思います。

一方、これまで当事者は、介助や介護など、ボランティアに依存する受身の立場でした。ところが、一昨年の「全国Vフェスティバルかながわ」でのフォーラム参加をきっかけに、当事者自身がボランティアに参加する、これまでボランティアに依存してきた部分を「仕事」に変えていこうとする意識が生まれてきました。

本センターとしては、これをチャンスととらえ、ボランティアと当事者が対等な関係で活動できる場を提供したいと考えています。また、例えば、当事者の中には、「車いすを海外に贈る活動」を行っている仲間がありますが、今後は、福祉関係だけでなく、環境や国際などといったVグループ、NGO等の連携も視野に入れ、新しい仲間づくりを通して、支援の裾野を広げたいと考えています。



当事者自身が作った本「バリアフリーかながわ」

## 障害者を支援するためにできることってなに？

### ボランティアセンターに 求められる障害者支援の 機能と役割

障害のある人が地域の中で安心して暮らし、V活動に関わるなど社会参加を支援するために、Vセンターはどのような機能や役割が必要なのでしょう。Vセンターに求められる支援を、ポイントでまとめました。

#### 1.社会参加のきっかけの場をつくる

障害者が「総合的な学習の時間」や福祉講座等の講師として活躍したり、障害者と地域の人々との交流イベントなどは、すでに多くの地域で実施されている。例えば、障害者を対象としたV講座を企画するなど、Vセンターは今後、障害者が自らの意志と行動で社会参加していくための場をつくることが求められる。

#### 2.地域の中で、障害理解を深める

共に活動する機会をつくるためには、地域に住む人たちの障害者への理解が重要になってくる。Vセンターは、市民向けのセミナーや勉強会を実施するなどして、市民一人ひとりが障害者を取り巻く地域課題を理解し、障害のある・ないに関わらず共に暮らせるまちづくりを進めることが大切。

#### 3.当事者グループのネットワーク化を支援する

障害者の当事者グループは、知的・精神障害、聴覚・視覚・肢体障害別に結成されている場合もあり、その種類や活動の目的も多様であるため、グループ同士が連携する機会が少ないのが現状。

また、実際にV活動に参加している障害者の中には、活動先までの送迎や車いす介助などのサポートを受けながら活動に参加している人も多い。

今後、当事者グループが社会への啓発活動を展開したり、自らがV活動などに参加するには、サポートが必要となるだろう。そのためには、Vセンターは地域の障害者の当事者グループとVグループ、市民活動グループ等とのネットワーク化を支援することが求められる。

#### 4.情報・相談拠点の整備を進める

各市町村における、障害者の活動参加に関する相談窓口が十分に整備されていないのが現状。また、障害者が利用できる福祉サービスや社会資源など、障害者が必要とする支援情報が十分に伝わっていないケースも多い。

こうした課題を解決するためにも、Vセンター内に相談活動の拠点を開設したり、当事者グループ専用の活動拠点を設置するなど、ハード面での支援も必要。その際には、Vセンターが全てをお膳立てするのではなく、地域の障害者グループや専門職の方々に参加を呼びかけ、協働で運営していく視点をもつことが大切。



### 障害者が 障害者を支援する際の ポイント

障害者が障害者を支援する際にどのような点に留意しているのでしょうか。障害のない人が障害のある人を支援する場合とは違った支援のポイントをまとめてみました。

#### 1.障害者の立場からアドバイスをする

ピアサポートに相談に来る障害者は、それぞれの想いやニーズを持っている。また、障害者は、社会参加へのストレングス・モデル「強み」を打ち出した方がよい。

社会や地域の中で、障害者が置かれている立場や、当事者が抱える諸課題を最も理解しているのは、まさに当事者自身である。障害者が障害者を支援する際には、まず「当事者の立場」から、悩みを共有し、課題解決に向けたアドバイスを送ることが大切である。

#### 2.一緒に成し遂げるが大切

相談については、まず相手の話を聞いて「受け止める」ことが大前提だが、その先は、課題解決の方向性を一緒に考えることが必要となる。

来談者の中には、今まで家族や施設職員に相談したが、話は聞いてもらえるものの「仕方がない」と諦めかけたうえで相談に来る人も多く、そうした人に対して何よりも心強いのは、一緒に活動に参加したり、成し遂げるたりすることを通して、「喜び」や「自信」を共有できる仲間ができること。また、そうすることで関係が強まる。

#### 3.同じ障害者が地域の中で楽しんでいるという 場をつくる

自分と同じような状態・条件の中にある障害者が、自立して就労したり、V活動に参加するなど、地域の中で楽しく生活している姿を見ることは非常に重要。「自分でもできるかな」「自分もやってみようかな」と自信をもてるきっかけをつくるためにも、当事者グループは、閉じこもりがちな障害者が参加したくなるような楽しいイベントや取り組みを行っていくことが大切である。

#### 4.偏った情報を流すだけではだめ

例えば、福祉機器の情報はよく知っているが、障害のない人が使用する掃除機の使い方は知らなかったり、福祉施設のことは知っているのに、一般的な観光施設やレジャー情報は知らないなど、障害者の多くは、比較対照となる情報が入ってこない。

今後、障害者が社会参加し、障害のない人とふれあい、地域の中で共に生活していくためには、多様な情報や価値観にふれ、取捨選択していけるよう市民と共通の情報を提供していくことが求められる。

# まだまだ現役！ 第2の人生を意義あるものに！

## 広がる定年退職者のボランティア・市民活動

企業の早期定年退職制度が進む昨今の社会情勢を反映して、企業や行政などで活躍していた人々が退職とともに、ボランティア活動や市民活動に参加するケースが増えてきています。

そこで今回の特集は、定年退職後も、これまでの経験や知識を活かして活躍する中・高年ボランティアの事例を紹介し、活動するうえでのポイントや効果についてまとめました。

### 男性ボランティアが中心となって 地域たすけあい活動を展開

#### サークル「鶴の恩返し」(神奈川県横浜市鶴見区)

##### きっかけは、「男性が対象の福祉講座」への参加

平成6年、鶴見区で初めての在宅介護支援センター「潮田地域ケアプラザ」(以下、プラザ)が開設。日常業務であるデイサービスと並行して展開していた地域啓発活動の一環として、プラザが実施した「男性のための福祉講座」の参加者4名が集まり、男性だけのVグループを結成。

結成後、毎月1回定例会をもち、何をやるべきか模索した結果、プラザの地域向け活動である「独り暮らし高齢者宅への配食サービス」にV参加することとなった。こうして平成7年、鶴見区初のプラザを支援する男性だけのVサークル「鶴の恩返し」の活動がスタートした。

##### 多様なニーズに応える「コンビニ型グループ」をめざして

「一般家庭の中で、男性が受け持つ部分は、男性グループの活動でできるはず」。こうした想いで、発足当初からあえて特定のテーマを設定しなかったため、同サークルの取り組みは多様多彩。また、「配食→おたすけまん活動→定期パトロール」というように、一つの活動を通して新たな活動へ広げるなど、自発的にニーズを発掘し、それに

応えるきめ細かい支援を心がけている。

以下、多彩な活動メニューから、主な取り組みを紹介する。

#### < 主な取り組み >

##### 1. プラザ事業の支援

|           |                                         |
|-----------|-----------------------------------------|
| 配食        | 食事サービスグループが作る食事を地域の在宅高齢者に配達(毎週火・木・土曜日)。 |
| デイサービスの補助 | できる曜日・できる時間にプラザ職員やスタッフのお手伝い。            |
| プラザ広報誌の発行 | 記事の取材・印刷・町内会への配布                        |

##### 2. 在宅高齢者の支援

|            |                                                          |
|------------|----------------------------------------------------------|
| おたすけまん     | 配食の際、高齢者から「困っていること」を聞き出す。草取り、日曜大工、掃除、家具の移動など、おたすけVが後日訪問。 |
| 定期パトロール    | 上記おたすけまんが受注専門の活動であるのに対し、ニーズの有無に関わらず定期的なフォローアップ活動。        |
| さわやかパンツショー | 人には相談しづらい「尿漏れ」の方を対象に、実演付きで解説する「おむつの普及講座」を開催。             |

##### 3. 中途障害者の支援

|                   |                                                                                      |
|-------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| ワープロ教室/<br>パソコン教室 | もともと区役所事業として実施されたワープロ教室だが、その後、サークル独自の活動へ。障害者にとってはリハビリや自立訓練に、健常者にとってはV活動の入口として、一緒に学習。 |
| 自助具工作隊            | 片手用爪切り、トイレトペーパー切り補助具など、工作好きなボランティアが生活自助具を手作りで。                                       |

##### さらなるネットワークを求めて

「コンビニ型グループ」として活動を展開する中で、同サークルでは様々なネットワークづくりを進めている。まず一つは、男性Vグループを増やすことを目的に平成14年に立ち上げた、「かながわ男性福祉Vネットワーク」。これは、市内4つの男性Vグループが協働で「男性福祉V講座」を実施するというもので、現在、社協や行政などに呼びかけて出前講座を進めている。また、すでに活動しているVグループがもつ共通の悩みや問題点を解決するための「スキルアップ研修」も計画中だ。

今後は、よりきめ細かいニーズに対応するため、「できないこと」を相互補完できるよう異業種グループとのネットワークづくりも検討している。

### 第2の成人式で、地域復帰の準備を



サークル「鶴の恩返し」事務局長・重岡昭男さん

もともと男性4名で始めた本サークルも7年が経過し、今では55名(うち18名が女性)となりました。男性Vの約8割は定年退職者で、平均年齢は65歳ですが、日々の活動でお役に立っているという実感が得られ、それが私たちの生きがいとなっています。

多くの定年退職者は、何の準備もなく地域に帰ってきますので、何をやっていいのか戸惑います。そこで私は、昨年行われた横浜市のフォーラムで鶴見区代表として市長に2つのお願いをしました。

一つは、地域に帰ってきてからをいかに生きるかの「企業の退職前準備講座」。もう一つは、区単位での「お帰りの講座」の実施です。これは、自分の住む地域を知り、生き方を学ぶもので、次年度の講座には、受講者の先輩が体験談を発表し後輩を励ますようにする。成人式が社会への心構えを学ぶものだとなれば、高齢社会の中、第2の人生への心構えを学ぶ講座があってもいいのではないのでしょうか。



「障子の張り替え」をするおたすけまん



キー操作は難しいけど、ワープロにチャレンジ!



おむつのモデルも講師もボランティアで

### 定年退職者による 海外協力ボランティア

#### 財団法人 日本シルバーボランティアズ(JSV)(東京都千代田区)

##### 定年後の生きがいが、途上国の発展へとつながる

開発途上国へボランティアを派遣し、海外現地で様々な技術協力を行っている日本シルバーボランティアズ(以下、JSV)は、昭和52年に結成された「シルバー奉仕隊」を前身とする。

奉仕隊結成のきっかけは、初代アジア開発銀行総裁・渡邊武氏の呼びかけによるもの。フィリピン・マニラでの6年間の駐在を通して、「途上国の自立支援を行うためには、物資や資金提供だけではなく、人的支援が必要」と感じていた渡邊氏は、優れた技術者たちが定年を機に引退してしまう当時の日本の状況をふまえ、「これまでの経験や技術をボランティアとして活かせば、技術者たちの新たな生きがいにもつながるし、途上国の発展にもつながる」との構想を発表。

多くの企業や国際協力機関の賛同を得て、有志60名でスタートした奉仕隊は、「自動車整備士」として初めてのボランティアをナウル共和国(オセアニア)へ派遣。以来25年間で65カ国、延べ約3,300名の中・高年の方々が途上国での支援活動に取り組んできた。

##### 地域の実情に合わせて基盤技術を伝える

JSVでは(1)海外でのV活動に参加を希望する会員の募集・登録、(2)途上国からの派遣要請の開拓と調査、(3)途上地域からの要請に基づくボランティアの派遣、という3つの段階を経て実際の活動が行われている。

海外現地での活動は、国・地域によって様々。現地に適応した作物を作るための土壌改良や品種改良、栽培方法の指導などの「農林・水産技術」、金属加工や機械製品の製造などの「工業技術」をはじめ、「日本語教師」や「医療・福祉」等、その支援内容は多岐にわたるが、大切なのは「先端技術ではなく、現地の実情に即した基盤技術の指導」である点だ。

現在のV登録者人数は760名、平均年齢は66歳。「途上国地域の

人々と交流し、異文化に触れる中で、新たな発見があった」「心が若返り、自分の世界が広がった」との声があるなど、毎年約220名前後の人々が新たな生きがいを感じ、海を越え、第2の人生を送っている。

##### 事務局ボランティアは、海外とボランティアの橋渡し

定年退職者であれば誰でも海外ボランティアとして参加できるとは限らない。JSVでは、V参加の条件として、(1)経済的な安定、(2)健康、(3)人の役立ち知識や技術の提供、(4)家族の同意、をあげている。事務局では現在、約15名のシニアVが運営を行っているが、こうした条件をクリアした中・高年Vへの良き相談役であり、海外現地とボランティアとを結ぶ橋渡しとなるなど、後方支援の役割を担っている。

JSVの冊子には、ある言葉が掲載されている。「志を立てるのに、遅すぎることはない」と。



紙芝居を使って  
青空教室  
(ネパール)



自動車工場  
で経営指導  
(中国)

### ボランティアで拓く新しい人生



日本シルバーボランティアズ 理事・羽賀 憲さん

私は若い頃、学校教師をめざしていたことがあって、第2の人生はその夢を叶えようと、定年間近に日本語学校へ通いました。一方、国際交流に関心もありましたので、海外Vを決意しJSVに相談に来たのがそもそものきっかけです。

地域との関わりが薄い会社員にとって、退職後はこれまでの「職縁」から「地域縁」「同好縁」などのグループに関わり、「自己表現」をしていくことが必要で、社会参加の大きな意味は生きがいの保持であります。海外Vは長年培ってきた技術や知識を、途上地域の発展と人々のお役に立ち、自分自身も成長する自己実現の場であり、最高の生きがいでもあるわけです。

JSVでは、毎年220名ほどのボランティアが海外へ向かいますが、私自身は、相談に来られる方の「第2の人生のナビゲーター」として努めています。今の時代のキーワードは「高齢化・生きがい・地球市民」。海外Vは、この3つの条件を満たしていると思います。

## 定年退職者のボランティア参加が増えてます!

中・高年世代や定年退職された方々のV活動状況はどのようになっているのでしょうか。  
全国社会福祉協議会の「全国ボランティア活動者実態調査」(平成13年12月現在)をもとに、まとめてみました。

### 1.活動者について

個人活動者別に見ると、「仕事をもっていない主婦(38.1%)」と「定年退職者(24.5%)」の2つの層が主力となっている。  
グループのメンバー構成別に見ると「60代以上の男性(25.7%)」と、定年退職後の男性や、仕事をもっている中年女性、子育て中の主婦層の参加も見られることがわかる。

### 2.活動内容と活動参加への動機など

活動内容は、「対人直接サービス型」や「人との交流型」が多く、「高齢者や介護者」、「障害児・障害者やその家族」を対象とした活動が多い。女性は「交流、遊び、コミュニケーション系の活動」、男性は「支援や指導」、「企画・運営」、もしくは「労力提供系」の活動が多い。  
参加動機を年代別に見ると、60代以上では「社会やお世話になったことに対する恩返しをしたかった(49.9%)」という動機が最も

高い。さらに、「生きがいになるものがほしかった(37.0%)」が高い割合を示したのも特徴。また、この世代にも「地域社会を知りたかった」、「仲間づくりがしたかった」(各々30.6%)があげられているが、定年退職した人々が職場社会から地域社会へと生活の場をシフトさせていくことが背景にあると考えられる。

### 3.活動をしたことによる効果

50～60代以上では「地域社会とのつながり」をつくることができた」をあげている割合が高くなっている。  
また、「活動自体が楽しい」とした人は、20～40代よりも50～60代で高くなっており、中・高年では活動自体を楽しめることを評価している人が多く、さらに「60代以上」では、「生きがいを得ることができた」と答えた人が53.3%となっており、他の世代よりも高い割合となっている。

## 地域に広がる可能性とボランティアセンターの支援は?



定年退職者がV活動や市民活動に参画することで、地域にどんな可能性が生まれるのでしょうか。  
また、Vセンターはどのような支援が求められるのでしょうか。ボランティア研究所の木谷宜弘氏にお話を伺い、V・市民活動の現状を通して見た、定年退職者の可能性と、それに対するVセンターの役割を整理してみました。

### 1.市民セクターのレベルアップにつながる

従来の社会は、行政と企業の2つのセクターが原動力となっていたが、NGOがそれらが入り込めない分野に活動参加しているなど、ボランティアや市民による「第3セクター」への期待が高まっている。  
一方、これまで、時間的余力のある女性や青年層がV活動の主力であったが、その中に、実践的な技術や知識・経験をもった定年退職者が参画することで、市民セクターのレベルアップにつながる。それにより、行政・企業と対等に協働できる「社会力」を地域がもつ可能性が出てきた。

#### → Vセンターの役割

定年退職者層はV・市民活動への参画意識や参加の機会が少ないのが現状。Vセンターは企業や行政に対し、定年退職者が自身の地域や課題を知る学習会や退職前講座などの提案・情報を発信し、定年退職者が地域に帰って来たときに、V活動へスムーズに参画できるよう支援することが必要である。

### 2.異なる人たちとの協働が活発になる

地域社会は現在、血縁・地縁のつながりが希薄になり、従来の日本的な仲間意識(共同意識)から、「多様な市民による協働」が重要になってきた。また、青年団、子ども会、老人クラブなどに見られるように、同年世代の仲間意識が依然として高い一方で、今後は「異世代・異文化」の人たちが協働して地域づくりを進めていくことが求められている。

企業等での経験やノウハウをもった定年退職者が地域に飛び出し、新たなグループを立ち上げたり、既存のV推進機関・グループに参画することで、こうした協働が進む可能性が生まれる。

#### → Vセンターの役割

異質の人たちによるコミュニティが形成されていないため、定年退職者が地域に出てもV・市民活動にとけこみにくいのが現状。Vセンターは、既存のV推進機関・グループに対し、異世代・異文化の人たちも参加できるような対応を求めることが必要で、そのための学習・情報提供を行うとともに、実践の場で協働活動が生まれるようなコーディネートを行っていくことが大切である。

### 3.子どもたちのサポーター役になる

Vグループの活動者が高齢化し、若い世代のV参加が期待されている。一方、学校教育の現場では「総合的な学習の時間」等に

見られるように、子どもたちのV・体験学習が進められているが、子どもたちの活動はあくまで地域社会を基盤とした取り組みであることが望ましい。

今後、子どもたちがより主体的にV活動を行うためにも、地域の大人がサポーター役として応援することが必要で、具体的な技術や知恵を培ってきた定年退職者は、子どもにとっても「魅力ある体験プログラム」を提供できる可能性をもっている。

#### → Vセンターの役割

「親子で体験V」や「自身が住む地域で行うプログラム」など、子どもと中・高年層と一緒に参加でき、かつ、故郷意識・地域意識につながるプログラムづくりや情報提供を行う。Vセンターは、従来のようにボランティアのニーズに応じてコーディネートするだけではなく、V自身が主体となって実践したり、新しい市民活動プロジェクトをつくりあげていくための支援が求められている。

## 定年退職者が架ける3つの橋

### ボランティア研究所 主宰 木谷宜弘氏

近年、定年退職後に、地域の中でV・市民活動に参画する方が増えてきました。定年退職された方々にとって、「第2の人生」とは新たな「生きがい」を見つけることですが、これまでの経験や技術、知識を地域の中で発揮し活かすことは自身の存在証明となり、それが生きがいへとつながっていくものと思います。

私は定年退職者には、(1)今日から明日への橋、(2)若い世代への橋、(3)自然と人とを結ぶ橋、という「3つの橋」を架ける役割があると提唱しています。例えば、自然を尊ぶ気持ちなど、時代と共に忘れられていくもの、失われていくものを大切に、次の世代に受け継ぐこと。また、自分自身が体験したこと・学んだことを「語りべ」として教え・伝えるという「文化の架け橋」としての役割もあります。

若者のV活動は「自分探し」とよく言われますが、定年退職者は「生きがい」を求めての、活動探しと言えるかもしれません。定年後に「自分は何ができるだろうか」とお考えであれば、この3つの橋をヒントに活動をスタートしてみてもいいかもしれません。

<訂正のお知らせ>

前号(ボランティア情報12月号)本ページにおいて、表記の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。  
●世田谷区社会福祉協議会 Eメールアドレス  
誤)shakyo@basil.ocn.ne.jp → 正)stshakyo@basil.ocn.ne.jp

# ふれあい・いきいきサロンの新たな展開

住民が 地域が 支え合う福祉のまちづくりをめざして

高齢者や障害者、子育て中のお母さんを対象に様々な「サロン」が地域の中で活動展開中です。また最近では、利用者の枠にとらわれない「複合型サロン」も出てくるなど、地域のニーズに合わせて多様な取り組みが開発されています。

そこで今回の特集は、新しい試みで運営されているサロンを紹介し、その特徴や活動のポイント、さらにはサロンが地域で果たす役割などについてまとめてみました。

## 区民が自分でつくり、運営する「ふれあい・いきいきサロン」

世田谷区社会福祉協議会(東京都)  
<http://www.setagayashakyo.or.jp/>

### 区民と社協、行政が協働で福祉のまちづくり

世田谷区では住宅地域が多く地域の帰属意識が低いので、住民に対し「ふるさと意識」を持てるようなイベント等を行っていた。一方、高齢化が進み、全ての福祉サービスを行政施策で補っていくには財政的にも、サービス提供のあり方としても限界があることから、平成6年、行政主体ではなく区民が力を活かしながら、地域の身近な場所で福祉サービスを提供する「地域支えあい活動の助成事業」がスタートした。

区民がお互いに助け合って、高齢者を支援するというこの事業では、介護教室やお茶会を地域の中で開くなどサロンの原型をなすもので、3年間サンセット事業として展開。事業終了後も、サロンを望む声が強かったことから、地域によっては区民の自主活動として継続するにまで発展した。

さらに平成9年には、行政と区民との協働を通して、それぞれの特性や役割を発揮しながら地域課題を解決するという、「新しい公共」の推進が、区民代表も参画する保健福祉審議会から答申された。こうした区民の意識の高まりと行政の方針を背景として、平成10年、同社協は「ふれあい・いきいきサロン事業」をスタートした。

### コミュニティワーカーが地域をサポート

同サロン事業では、「気軽に・無理なく・楽しく」をスローガンに、高齢者の閉じこもりを防ぎ、地域で見守り・支え合う「ふれあい・いきいきサロン」、これに食事サービスや介護予防などを加えた「支えあいミニデイ」、子育てお母さんのリフレッシュのための「子育てサロン」の3つの取り組みを行っている。現在のサロン設置状況はそ



れぞれ212カ所、63カ所、32カ所で、これらは全て区民がV活動で運営している。

社協では、活動補助金や会場費、独自に開発した「支えあい活動保険」加入のほか、Vスキルアップ研修などの支援を行っている。そして、区民のサポート役として最も重要な役割を果たしているのが、「コミュニティワーカー」(以下、ワーカー)と呼ばれるサロン担当職員である。ワーカーは区内3カ所の地区社協に配属され、サロンの立ち上げに関わる専門的なアドバイスから、継続のためのきめ細かい相談を行っており、平成10年の設置以来、飛躍的にサロンが増えたことから存在の大きさがうかがえる。また、毎月1回行政職員も参加するワーカー会議も実施し、地域の課題を共有するとともに、区民・社協・行政とのパートナーシップを実現している。

岐にわたっています。

サロンの効果としては、地域の身近な場所に相談できる場所ができたことと、サロンを通じて地域の団体・機関・行政との協働が生まれたこと。また、サロンに子どもたちが関わることで世代間交流や福祉教育の場にもなっています。最近では、あるサロンで企画を立てた時に、他のサロンにも呼びかけ合同で実施したり、連絡会を作るなど、サロン同士のネットワークも生まれてきました。

このように、サロンが当初の想像を超えた「自律型」で発展してきているなかで、社協がどのように住民と協働していくべきか。さらに、スタッフの世代交代や、プログラムを展開するうえでのコーディネートなど、サロンによってはご苦労されている課題もありますので、今後は、人と人をつなぐ「マグネット」としての役割を、私たちワーカーが担っていければと考えています。



マグネット役として  
人と人をつなげていきたい

世田谷区社会福祉協議会  
世田谷地区コミュニティワーカー 阿藤 京子さん

世田谷区ではこれまで、住民自治を目的とする様々な事業を通して、「きっかけがあればV参加したい」とする住民が4割を超える意識結果が出るなど、全国的にもV活動意欲が高い地域となっています。そうした地域性を背景に、「サロン」という「誰もが気軽に楽しく」参加できる取り組みを展開するなかで、ワーカーは直接窓口として区民の皆さんと接してきました。

現在、私を含めて8名のワーカーが区内3地区でサロンの支援活動を行っています。サロン立ち上げのための会場手配をはじめ、プログラム案内のチラシづくりや配布、活動内容に関する相談など、支援の内容は多

## 高齢者も子どもも障害者も 気軽に集まる憩いの場

特定非営利活動法人「トトロの家」(石川県内灘町)

### 家族の健康を住民みんなで考えよう

地域の有志20名を中心に、平成13年4月に発足したトトロの家は、10年前に結成された「健康で楽しく暮らそう内灘の会」を前身とする。同会は、地域住民約100名を会員として、栄養や介護に関する勉強会のほか、花見やバス旅行などの親睦会を行ってきた。

さらに、介護保険施行を前に、町内で様々なシンポジウムを開催する中で、「せっかくの勉強会を会員限定で行うのはもったいない。地域にボランティアの輪を広げよう」との提案を受け、高齢者だけでなく子どもから障害者まで気軽に交流を楽しめるサロンとして民家を拠点にスタートした。

### さらなる活動の輪を求め、NPO法人を取得

週2回の開所日には、高齢者同士で手作り工芸や世間話などを通じての交流のほか、小学校児童が授業後、気軽に立ち寄る場となるなど、多いときには約30名も集まり大盛況。また、「大きいお風

## 「ITカフェ」で 高齢者がパソコンに挑戦！

日吉台の福祉を語る会「あじさいくらぶ」(滋賀県大津市)  
<http://www.geocities.co.jp/SweetHome-Ivory/3569/>

### ボランティアの協力を得て活動拠点が完成

約5,000人が居住する日吉台は、20年以上前に開発された新興住宅地で住民の高齢化が地域課題となっていた。そんな中、地域の有志25名が集まり、「どんなときも住み慣れた家で暮らせるような地域づくり」と「誰もが気軽に利用でき、楽しく支え合える福祉拠点づくり」を目的に、平成4年、公民館の自主活動サークル「あじさいくらぶ」を結成。

老人会との交流会や高齢者のおしゃれ講座などを実施する中で、高齢者から「おしゃべりの場」を望む声が多かったが、平成6年に、



夏休みを利用して  
囲碁・将棋  
教室を開催

呂を楽しみたい」という利用者の要望を受け、町営温泉への入浴サービスもプログラムに加わった。

一方、1年数ヶ月の活動を通して、元気な高齢者が訪れる中で、介護保険に認定された利用者も増えてきた。しかし、「他の利用者に迷惑をかけるのでは」「昼食は粥しか食べられないから」と通所を遠慮する高齢者も出てきたので、より活動に広がりを持たせるためにも、NPO法人を取得することが必要と、新たに看護師やヘルパーを雇用。7月に認証を受け、要介護者を対象としたデイサービスを開始した。

現在は週2日の生きがいサロン(利用料500円)と合わせて、毎週日曜日以外の週6日午前9時30分～午後4時まで、ボランティアによる手作り昼食や入浴、健康チェックやレクリエーションなどで通所介護を行っている。



トトロの  
お彼岸は、  
お団子づくり

10時～15時まで昼食をはさんでいつでも参加できる「あじさいサロン」を開設。平成11年には、介護福祉士の協力も得て「ケアルーム」を開設し、在宅介護が必要な家族や、家の中で孤立しがちな高齢者との交流支援を行ってきた。

しかし、これらはすべて公民館と集会所を借りての活動だったため、常時開放できる交流の場が必要となってきた。そこで、大津市社協の助成事業に応募。助成対象となったものの、バリアフリー化の改造可能な家探しに難航する中、地域の方が倉庫にしていた空き家の一部を提供。バリアフリー化をはじめ、室内リフォーム、不用品家具の調達など、多くのボランティアの協力を得て、平成14年、念願の活動拠点「あじさいの家」が誕生した。

### 男性ボランティアが個別にパソコン指導

あじさいの家では、いつでも気軽に立ち寄れる常時開放サロン「喫茶室」を新たに開始。週2日、10時～15時オープンの喫茶では、美味しい飲み物のほか、囲碁・将棋など趣味の部屋を設けるなど、アットホームな雰囲気年代を超えた交流の場となっている。

また、高齢者のIT化をサポートすることと、男性Vの参加、幅広い年齢層の参加を目的に、今年4月からは「ITカフェコーナー」も設置。「ワードで俳句を書いてみたい」「旅行の際にインターネットで情報を得たい」など予想以上に受講希望が多いことから、講師である男性Vが自主的に公民館と交渉し、カフェを移転。年末を迎えた現在では、50代～80代までの受講者がパソコンを使った「年賀状づくり」に挑戦している。さらに今後は、IT講座を実施し、V講師や離れた家族とのメール交換を計画している。

## ふれあい・いきいきサロンは地域の中で人と人をつなぐ交流の場！

そもそもふれあい・いきいきサロンってなにか、サロンは地域の中でどんな効果があるのでしょうか。  
また、サロン活動の輪を広げるためには、社協にどのような支援が望まれるのでしょうか。  
ここでは、実際の活動者と社協スタッフのお話を参考にして、ポイントでまとめてみました。

### サロン活動3つのポイント

#### ●地域の誰もが参加できる憩いの場

高齢者や障害者、子育て中のお母さんだけでなく、サロンは地域の誰もが・楽しく・気軽に参加できる「憩いの場」。公民館や住宅団地の集会所、個人宅など、地域の身近な場所を活動場所としてもいいし、場所を限定しない「お花見」「散歩」なども立派なサロン活動である。昼食や喫茶をとりながら、レクリエーションやゲーム、健康体操、おしゃべりなど、各サロンごとに自由に無理なく楽しめる場であることがポイント。

#### ●住民の誰もがボランティア

高齢者や障害者のおしゃべり相手、食事づくりや散歩の付き添い、介護や栄養面の専門的なアドバイスなど、サロンでのボ

ランティアの役割は多種多様。時には利用者自身がボランティアとなり、子どもたちに手芸、伝承遊び教室等を開催することもあるなど、ボランティアと利用者の区別なく、住民の誰もが主役として活動できる場である。

#### ●形にこだわらない

サロンの活動目的は様々だが、どんなサロンをつくるにせよ、形にこだわらず、その地域や生活者にあった場をつくり出すこと。また、たまたま訪れた人であっても楽しく参加できるような雰囲気づくりや、利用者もボランティアも楽しめる活動メニューを心がけ、地域に根ざした交流の場であることが大切。

### サロンができてこんな変化がありました

#### ●利用者が元気になった。近所づきあいが増えた

利用者から「お互いに誘い合って出かけるようになった」「健康に気をつけるようになった」の声があるなど、高齢者や障害者の引きこもり防止や、やりがい・生きがいにつながっている。また、独りきりで家にいる時間が少なくなったことで、防災・防犯対策にもなっている。さらに、「話すことが楽しくなった」「あいさつや立ち話をするようになった」など、サロンでのふれあいを通じて、顔見知りが増え、地域の中で住民同士のコミュニケーションが増えてきた。

#### ●地域の中で協働関係が生まれた

あるプログラムを実施するに際して、地域の専門家を講師に招いたり、総合的な学習の時間を利用して、学校の子どもたちがサロンでボランティア体験を行うなど、サロンを通して地域の様々な機関・団体との協働関係が生まれてきた。

#### ●地域の福祉やボランティア活動に対する意識が高まった

専門的な施設とは違い、サロンのように気軽に立ち寄れる場所が地域の身近な所に点在することで、安心して暮らせる町へと変化した。また、スタッフやボランティアとして地域の多くの方たちが関わる機会が増え、地域で支え合う機運が生まれ、地域全体の福祉力アップにつながっている。

#### ●情報発信・情報交換の場になった

「ここでの情報が日常生活に欠かせない」の声もあるなど、見逃してしまいがちな地域の福祉サービス情報を得ることができる。また、同じ課題や悩みを抱える利用者同士が交流できる場ができたことで、利用者やその家族にとって心身のリフレッシュにつながっている。

### 社協に求められる支援とは？

#### ●サロン活動へのきっかけをつくる

サロンの意義や成果などの報告・事例を広報誌やイベントを通して、広く伝えていくことで、地域住民に対し、サロン活動に取り組むきっかけをつくる。また、活動を望む人に対して、助成金やボランティア活動保険、行政へのアプローチの仕方など、細やかな相談に応じ、立ち上げを支援する。

#### ●活動継続のための側面的な支援

ボランティア参加をはじめ、地域の施設、病院、医療・福祉関係者、民生委員・児童委員等の専門的な人材など、地域における社会資源とサロンをつなぐとともに、サロンと協働して福祉のまちづくりを担っていく。また、住民が主体となって活動を継続していけるよう、ボランティアのスキルアップ研修やサロンリーダー交流会等を開催し、活動プログラムの充実や意見交換等の調整を図る。

### 第1回ふれあい・いきいきサロン 全国サミットが開催されます

現在、2万グループを超えるふれあい・いきいきサロン活動が展開されるなか、第1回となる全国サミットが開催されます。当日は、「地域福祉の切り札はこれだ!」を総合テーマに、全国のサロン関係者、関係団体が集まり、サロン活動事例の紹介や情報交換、交流を行うなど、サロンの新たな展開を考え合います。

#### ●平成14年12月14日(土)10:00～16:30

(会場)東京都・世田谷区民会館集会室ほか

(プログラム)活動事例発表・情報交換等

#### ●平成14年12月15日(日)10:00～16:15

(会場)東京都世田谷区・国士舘大学ホール

(プログラム)

・講演会 竹内孝仁氏(日本医科大学教授)

和田敏明氏(全国社会福祉協議会事務局長)

・シンポジウム「まる見え! ふれあい・いきいきサロン～サロンはing(進行形)」

●応募締切:平成14年12月10日(火)

●参加お申し込み先

京王観光(株)東京中央支店 TEL.03-5351-7161

●お問い合わせ先

世田谷区社会福祉協議会 地域福祉部

TEL.03-3419-2172

http://www.setagayashakyo.or.jp/

Eメール shakyo@basil.ocn.ne.jp



みんなで楽しく昼食タイム！



中学生の「お姉さん」が  
V体験に来ました！

## 異年齢の交流が広がる 小学校の余裕教室での子育て支援

子育て支援ボランティアグループ  
「きらきらぼし」(神奈川県茅ヶ崎市)

### 誰もが安心して参加できる「子育てのたまり場」

茅ヶ崎市湘北地区に「子育てのたまり場」を創りたい。地域で人形劇サークル活動を行う有志と主任児童委員、民生委員の4名の想いによって、平成10年に結成し、10月に子育て支援グループ「きらきらぼし」が誕生した。手作りチラシをスーパーで配布したり、子育て中の母親に直接声をかけるなど、4組の親子が参加することとなり、同地区の団地内にある集会所で月1回の活動を開始。

そんな中、自治会、PTA、社協、行政等が参加する市民集会の中で、他のV団体とともに「活動拠点」を求めた。約1年にわたる協議を重ねた結果、平成11年10月より小学校の余裕教室を改装した「多目的室」がオープン。こうして、「学校」という地域の誰もが安心して参加することができる場での子育て支援が、本格的にスタートした。

### ポイントは4つの場

活動日時は、毎週月曜日と第3土曜日の10時～14時。親や保護者、子どもたちが自由に過ごせる「オープンスペースの場」、出会いや情報交換をする「交流の場」、異年齢の子どもたちが遊びを通じて「触れ合う場」、親や保護者が地域の方と「知り合う場」の4つの場をポイントに活動を行っている。現在の親子参加人数は平均15組。最近では、母親と一緒に父親の姿も見られたり、祖父母が孫を連れて来ることも。

また、昼食時には、それぞれが持ち寄った弁当を親子もボランティアも一緒に食べるのが特色で、子育ての悩みなどを話し合う大切な一時となっている。

### 小学生から大学生まで。異年齢のボランティア交流

余裕教室を活用するにあたり、ボランティアが思い描いていたのが「小学生との交流」。実際に、休み時間を利用して小学生が訪れることも多く、乳幼児にとっても「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」は魅力的な存在で一緒に遊んだり、小学生にとっても授業とは違う雰囲気ですらリラックスできる貴重な時間ともなっている。

特集

# 地域の“共育力”を 育てよう！

## 子育て支援のあり方を考える

都市化した社会での子育てが密室化し、子育て不安の一般化や児童虐待など深刻な課題があるなか、子どもを地域社会全体で守り育てるという視点が求められています。

地域の大人たちや各種組織・団体が子どもに関わることで、子どもの健やかな育ちを支援し、地域の安全を守るとともに、地域社会としての“共育力”(大人と子どもが共に育ちあう力)も育まれていくものと思います。

そこで今回の特集は、子育て支援を進める活動事例を通して、地域社会における子育て支援のあり方を考えていきます。

また、4年前には公民館事業「保育ボランティア体験」を共催で2年間実施。これは、主に中・高生が保育Vを体験するというもので、これをきっかけに現在では夏休み期間を中心に、中・高生以外にも専門学校生・大学生も参加するようになった。当初は「親子の遊び場に中高生がなぜ？」と不安げだった母親たちだが、今では我が子と遊んでもらう一方で、進路相談など若者の悩みを聞く姿も見られるようになった。

その他、毎年行われるきらきらぼしの「誕生会」に人形劇サークルや読み聞かせのVグループなどが参加し、地域のVグループとのつながりも広がっている。



お母さん同士がつながり、  
地域の人々がつながり始めました

子育て支援ボランティアグループ「きらきらぼし」  
代表・小澤美江さん

私が大阪市に転勤していた時に起きた阪神・淡路大震災以来、「自分にできることはないか」との想いを持っていました。茅ヶ崎市に再び帰ってきて「人形劇サークル」に参加しながら、市内の「子育て支援センター」でレスパイト保育者として関わる中で、「地域版の支援センター」を作りたいとの想いが募り、何もわからぬままグループ結成に携わりました。

当地区では、2歳以上の親子が自主的に活動しているコミュニティ保育サークルがあるため、「きらきらぼし」には乳幼児の親子が多く参加されます。

現在10名の保育ボランティアが当番制で活動を行っています。私たちは、お子さん同士を遊ばせる雰囲気を作って、親御さん同士がゆっくり話す時間ができ、仲間づくりにつながるよう心がけています。

活動拠点である鶴が台小学校の余裕教室は団地内にありますが、今まではお隣り同士でさえ知らない世帯があったのに、きらきらぼしでの交流を通して団地の中でも顔見知りが増え、子どもを預け合ったりしているようです。町の中では、保育V体験をした中学生からお子さんの名前を呼ばれたり、地域での顔見知りが増えたように思います。

最後に同じく高校生からの感想を紹介いたします。「母親というものが、子育てについてこんなに悩みを抱えているとは知らなかった。このV体験を通して、自分の母とのコミュニケーションが深まったように思います」。

## 障害のある子もない子も、 おもちゃを通じて楽しく交流

小松おもちゃ図書館サン・アビ/ボランティアグループ  
「つくしんぼ」(石川県小松市)

### おもちゃの図書館はボランティアによる運営で

石川県出身である「財団法人日本おもちゃ図書館財団」創設者・故山科直治氏が「ぜひ小松市にもおもちゃの図書館を創りたい」との想いから、県社協を中心におもちゃの図書館開設に向けた動きが広まり、平成2年8月、勤労身体障害者施設「小松サン・アビリティーズ」の一室を拠点に開設することとなった。

運営は、当時サン・アビを拠点に音訳V活動を行っていたグループに依頼。これまで障害児と接したことがなかったメンバーは戸惑いながらも、元知的障害児施設職員のサポートを得て、設立に向けての準備を行った。当初5名だったメンバーは個々に声かけしたり、広報誌で募集をかけた結果、30名のボランティアが集まり、おもちゃの図書館の運営を行う「つくしんぼ」が結成された。

### 心のバリアフリーをめざした図書館利用

「小松おもちゃ図書館サン・アビ」の開館日時は、水(午前10時～15時)・土(午後1時～15時)・日(第2・第4午前10時～15時)。おもちゃの貸出は1人1点で、2週間を期限にカードに記入して貸出することになっている。

利用に際しては、障害児とその親子に限らず健常の乳幼児でも「すぎなの子」として登録すれば、自由に遊べる場であるが、開館以来、おもちゃは障害児だけに貸出をしてきた。しかしここ数年、登録者数は増えているにも関わらず、利用者が減少。その原因として、「おもちゃの図書館＝障害児と見られるから」という障害児の保護者の想いがあり、障害児自身からの「どうして自分たちだけ借りられるのか」という疑問があった。

急遽メンバーで話し合いをもった結果、スタート時90点しかなかったおもちゃが400点以上に増えていたこと、そして何より「心のバリアフリー」をめざして規則を変更。今年5月より、障害のあるないに関わらず誰もがおもちゃで遊び、借りられるおもちゃの図書館へと生まれ変わった。

沢山の子どもたちと  
親御さん。今日も大  
賑わいです！



### 「おもちゃ」がつなぐ、多彩な取り組み

開館日には毎回、5組から15組程の親子が訪れるが、特に平日の水曜日には乳幼児を連れた母子で一杯。おもちゃに夢になる子どもに気を配りながらも、母親同士で情報を交換したり、おもちゃ整理などボランティアの手伝いをしたりと、子育てサロンの場。

一方、おもちゃがつなぐ地域との関わりも多彩である。その一つが「移動おもちゃ図書館」で、市内の重度心身障害児施設を訪問し、毎月1回実施しているほか、障害児が通う小学校や障害児をもつ母親たちの研修会時に保育Vも兼ねて訪問するなど、依頼があれば積極的に取り組んでいる。

また2年前に、地域の工業高校から「生徒の地域貢献活動を」との相談を受けたことをきっかけに、年1回開催する図書館バザーでもおもちゃ修理を行ってもらっているほか、今では図書館専用の「おもちゃ病院」として高校生たちも協力。

現在、「育成会」と連携し勉強会やイベント等を行っているが、今後はその他の障害者グループとの協働も視野に入れ、地域の中でさらに幅広い支援活動をめざしている。



20代から90代まで  
助け合える仲間と一緒に

ボランティアグループ「つくしんぼ」  
代表・宇井真理子さん

通常の子育て支援は「健常児」が中心ですが、おもちゃの図書館は「障害児」が中心となります。そのため、子どもたちへのサポート以上に「お母さんの心のケア」が大切。私たちボランティアは、「心を打ち明けて話ができる」「家庭の中では難しい、子どもを遊ばせてくつろげる」場づくりを心がけています。

おもちゃは鍵のかかったガラス棚に収納しており、子どもたちが自ら「貸して」と言うプロセスを大切にしています。これは、子どもと保護者が一緒にどのおもちゃで遊ぶか相談をするという「言葉の交流」と、遊び終わったら自分で棚に戻すという「片づけ」の習慣を身につけてほしいから。

ボランティアは交代制で、約3名が図書館での活動を行います。20代の若者はクリスマス会で音楽演奏を、最高齢の97歳のおばあちゃんも「子どもたちの顔を見ていつもニコニコ」、個性や特技を活かして活動しています。また以前、重度の障害児をもつお母さんがショックでひきこもっていた時、家族が図書館の存在を知り、お母さんを連れてこられました。来てみたら、「障害のあるのは自分の子どもだけじゃない事」がわかり、皆がいろいろ応援してくれるのも知って子どものために自分が頑張らねば」という気持ちが芽生えた。今では「あの頃の私のようなお母さんがいたら力を合わせていこうと声をかけてあげたい」と、積極的におもちゃの図書館の活動に関わってくれています。

現在、ボランティアは52名。誰かが困っていると助け合える仲間、それが「つくしんぼ」のメンバーです。

## 「共育力」を育むために

地域社会の「共育力」を育むために、どのような子育て支援が求められているのでしょうか。ここでは、特定非営利活動法人「日本子どもNPOセンター」専務理事であり、本誌の編集委員でもある福田房枝さんに「地域社会」「ボランティア・市民活動」「ボランティアコーディネーター」3つの視点でお話を伺い、ポイントでまとめました。

### 地域社会に求められる子育て支援

#### 1. 子育て支援の多様性を認識する

核家族化、地域社会での人間関係の希薄化、女性の社会進出、長引く不況など、現代の社会状況と価値観の多様化に伴い、子育て中の女性が抱える悩みも多様化している。

「子育ては昔の女性なら誰でもやってきた」という古い価値観や、従来のような画一的な支援では、100者100様と言われる子育て中の親たちのニーズを支えきれないことを、まずは地域社会が認識しておくことが大切である。

#### 2. ニーズの多様化に対応する

「自分の時間がない。一人になりたい」という悩みを抱える母親に対しては、理由を問わず子どもを預かる「一時保育」の場を。「話し相手・友達がほしい」という0歳児を持つ母親に対しては、「室内版の公園」を。「子どもを育てる自信がない」等々、その他諸々の悩みをカウンセリングできる「育児相談所」を設けるなど、地域社会は多様化するニーズに対して個別に対応できる支援サービスを考え、提供していく必要がある。

### ボランティア・市民活動が担う支援

#### 1. 子育て支援についての「専門性」を持つ

個別に対応する子育て支援を提供するのは、公的サービスだけでは難しい。そこで、力を発揮するのが「ボランティア・市民活動」の領域である。

今後、多様化するニーズに対応していくためには、「専門性」のある応援者としての支援が求められる。例えば、保育士に求められるような技術や医学的知識、さらには、親の背景にある個別的ニーズを把握できるスキルなどが望まれる。

#### 2. 最終的な目的は、「子どもの成長」を支援すること

子育て支援において、子育て中の親を支援することはもちろん重要なことだが、最終的な目的は「子どもたち」の健やかな成長・発達を、社会が責任を持って支援することである。

そのためには支援者は、時として「親としてどうあるべきか」のアドバイスや、「親が親として育つ」ための支援も求められる。

#### 3. 「女性の自立」と「夫の育児参加」を促す

社会でキャリアを積んだり、あるいは、家庭の経済的不安などから、「出産後、働きたい」という女性のニーズも多い。今後は、保育園に預けながら技術を磨いたり、資格を取得するなどの「就労支援」も求められる。

一方、「夫と子育ての喜び・苦しみを共有できない」「夫は帰宅時には疲れ果て、会話の時間が持てない」など、子育て中の女性が抱える悩みの中で最も多いのが、実は「夫」との問題。

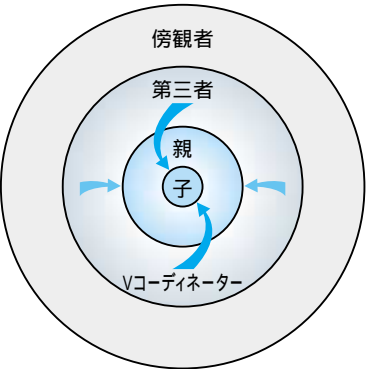
「子育て支援＝母親支援」と思われがちだが、男性の育児参加を促すことも必要であろう。例えば、「土日を利用した男性の育児企画」や「企業での育児休暇の取得」など、魅力的なプログラムの提案や社会制度の整備も必要だが、「子どもと関わる」ことが、自身の豊かさにつながる」ことを男性に意識的に啓発していくことこそが大切。

### ボランティアコーディネーターとして求められるもの

#### 1. 「第三者」としての自覚をもつ

地域の中に4重構造があるとの視点をもつことが大切。「児童虐待」を例にとれば、暴力を受ける子どもがいて、暴力をふるう親がいて、気づいていながら注意しない傍観者がいる。そして、注意する立場が「第三者」。

Vコーディネーターは常に地域の中の「第三者」の一人として、現場に関わっていくという自覚をもつことが大切。



#### 2. 地域の資源をつなげ、女性の自己実現の場を提供する

子育て中の女性の中には、「何かをしたい」「社会の役に立ちたい」と潜在的な意識を持っている人も多い。Vコーディネーターは今後、VグループやNPOと専門家、行政等をつないで、そうした女性たちの自己実現やきっかけづくりの場を提供・支援していく必要がある。

#### 3. 魅力あるプログラムを企画・開発する

プログラムづくりの際に留意したいのが、「今までこうしていたから」ではなく、親の「こうしてほしい」とか、ボランティアの「こうしたい」という想いを引き出し、それをグループの立ち上げやプログラムづくりにつなげるという視点。それがVコーディネーター自身のやりがいにもつながり、自身が楽しく関われる秘訣にもつながる。

# ボランティア・市民活動センターに向けて

今後のボランティアセンターの機能として、ボランティア活動だけでなく、NPOを含めた市民活動や当事者活動などとの協働・支援が期待されています。

全国の市区町村社協・ボランティアセンターの中には、市民の主体的な力量形成、身近で楽しく力強い活動とイメー

ジづくり、協働推進のためのルールと仕組みづくり、社会貢献マーケットの形成に向けた支援が進められています。

そこで今回の特集は、こうしたボランティア・市民活動センターへのさらなる充実をめざして、様々な事業に取り組んでいる事例を紹介し、協働に向けた支援のポイントや期待される効果についてまとめてみます。

## 地域と家庭と学校が協働で、子どもたちの休日をサポート

徳島県・海南町社会福祉協議会 海南町ボランティアセンター

### 地域が一体となって子どもたちをサポート

徳島県の南部に位置する海南町は、約6,000人の人々が住む自然豊かな町である。しかし最近では、かつてのような外遊びをする子どもたちの姿を見かけることが少なくなる中、「学校週5日制」が実施され、子どもたちの休日の過ごし方が問題となってきた。

一方、地域には児童館や学童保育施設などの整備が不十分であることから、子どもたちの「体験の場」をつくるとともに、地域が一体となって活動を展開することで、豊かなまちづくりへとつなげていこうと、「海南まちぐるみで子どもサポート事業」への取り組みが始まった。

### 体験の場「びっくり箱」の誕生

事業を進めるにあたって、V活動団体を核として委員会を結成し、地域課題の整理や役割について検討を重ねた。また、学校や家庭、地域住民にも働きかけながら、具体的な活動へと進めていった。

事業スタートから約半年を経て、子どもたちが「ものを作る」「校区や世代・障害の枠を超えて、人とふれあう」「地域や季節を知ることの喜びを実感する場」びっくり箱」が誕生した。

ここでは、その経緯と協働への取り組みを時系列で紹介する。



#### 地域と家庭と学校の連携の強化をめざして

海南町社会福祉協議会 海南町ボランティアセンター  
地域福祉活動コーディネーター 前野洋子さん

「びっくり箱」への取り組みは、多くの住民の協力により、これまで5回実施することができました。最近では、子どもたちから「今日はびっくり箱やってますか?」と問い合わせがくるなど、昔の遊びやこの世に一つしかないものを作り出す体験、昔のような地域の人たちとのふれあいなど、子どもたちにとっては新鮮な空間になっていると思います。

また、保護者からは「近所のお兄さん・お姉さんたちと、夜遅くまで遊んでいた幼い頃を思い出した」「休日に子どもとふれあうゆとりがない中で、楽しく休日を過ごす機会ができた」など、継続した活動を望む声が寄せられています。

今後は、地域のあらゆるところで小さな「びっくり箱」が開催されることをめざす一方で、児童・青少年を支援する会のメンバーに、中学生や高校生に参加してもらえるよう働きかけていく予定です。地域の大人は「ゆとり」の時間が少ないのが実情ではありますが、社協としては、「総合的な学習の時間」のプログラムづくりを学校と共に考えていく機会をつくり、地域と家庭と学校の連携をより強固なものにしていきたいと考えています。



色紙を使ってコマづくりに挑戦!

| 平成14年        | 内 容                                                                                                                                                         | 協働体制                                                                    |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 6/14<br>(金)  | 第1回「海南っ子集まれ!」子育てを考える会(以下、子育てを考える会)を実施<br>(1)会のねらいについて確認し合う<br>(2)地域から見た海南町の現状を出し合う<br>(3)どんな取り組みにしたいかを検討                                                    | 住民参加V活動推進委員会が主になり、社協Vセンターに登録している団体の代表に呼びかけを行う                           |
| 7/10<br>(水)  | 地域の小学校(3校)の家庭にアンケートを実施                                                                                                                                      | 窓口は学校にお願いする                                                             |
| 7/31<br>(水)  | 第2回子育てを考える会を実施<br>(1)アンケートを見て感想を出し合う<br>(2)ワーキンググループを決めて、アンケート結果を表やグラフにまとめることにする                                                                            |                                                                         |
| 8/30<br>(金)  | 第3回子育てを考える会を実施<br><アンケート結果の考察><br>・休日は家で遊ぶ子どもが多い<br>・土曜日に休みの保護者は少ない<br>・子育ては家庭だけで十分。地域の支援に期待しない保護者もいる<br>・ふれあいの場や遊びの場がほしい                                   | 推進委員会の見直しと、どんな取り組みが可能か次回までの宿題とする                                        |
| 9/25<br>(水)  | 第1回児童・青少年を支援する会の実施<br><新たなメンバーが加わり、事業の概要と今後の進め方について検討><br>(1)第4土曜日に子どもたちが集える場を作ること<br>→当日の担当は、会のメンバーが輪番制で<br>(2)講演会で子どもに向き合うことを学んでいく<br>(3)メンバーそれぞれがロコミで広報を | 事業のネーミングと具体的な活動内容は宿題                                                    |
| 10/3<br>(水)  | 海南中学校PTAと講演会を共催                                                                                                                                             | 保・幼・小学校の保護者にも呼びかける(120名参加)                                              |
| 10/25<br>(金) | 第2回児童・青少年を支援する会の実施<br>(1)名前は「びっくり箱」に決定<br>(2)具体的な活動内容を検討                                                                                                    | ・子どもたちへの呼びかけ文は、学校に配布協力を依頼<br>・中・高校生へボランティアの呼びかけ                         |
| 11/14<br>(木) | 海南町の教育を考える会へ参加                                                                                                                                              | 小・中・高校の校長先生、PTA会長、教育委員に「びっくり箱」の取り組みを説明                                  |
| 11/15<br>(金) | ワーキンググループのメンバーによって具体化へ                                                                                                                                      |                                                                         |
| 11/23<br>(土) | 第1回びっくり箱を実施<br>活動内容:<br>・お手玉づくり・こまづくり<br>・お手玉・こま回しの達人が模範演技を披露<br>・参加者全員にアンケート(書けない人にはインタビュー)                                                                | 担当:Vグループ「레인보」<br>参加者:<br>子ども...32名<br>達人...8名<br>保護者...12名<br>ボランティア20名 |
| 11/29<br>(金) | 第3回児童・青少年を支援する会の実施<br>第1回「びっくり箱」の反省と、次回に向けた話し合い                                                                                                             |                                                                         |

### 事業を通してのポイント

- ・住民参加ボランティア活動推進委員会が関心度の高いVグループに呼びかけて取り組んだことで、Vグループの組織化ができ、地域をあげての広がりにつながった。
- ・事業に先立ち、アンケート調査を行ったことで、子どもたちの家庭での様子や、保護者の子育てに対する考え・状況を把握でき、地域の実情や課題が明確になり、地域資源の協働体制の強化につながった。
- ・様々な方面からの協力支援により、子どもたちに多様なメニューを提供することができた。

## ともに生きる心豊かなまちづくりをめざして

長野県・辰野町社会福祉協議会 辰野町ボランティアセンター

### Vセンター事業の経緯

約2万3,000人が暮らす森林と清流に囲まれた自然豊かな辰野町に、Vセンターが開所したのは昭和63年のこと。社協事務所の一角で活動を進める中、利用者から「気軽に立ち寄れるVセンター」の要望を受け、平成10年に念願の拠点を得た。これを契機に、福祉だけでなく、地域の様々なV活動・市民活動を支援する「総合的なVセンター」へと生まれ変わった。

さらに平成11年には、独立の拠点を得たことで、ボランティアやリーダー層を育成する講座の実施をはじめ、地域でのネットワーク化や少人数の職員をサポートするための体制づくりを含めた、Vセンター機能の充実を図るための事業も展開。こうして「ともに生きる心豊かなまちづくり」に向けた、実践的な取り組みがスタートした。

### 豊かなまちづくりの第一歩は、まず「人づくり」から

同Vセンターでは「心豊かなまちづくり」と併せて、「人づくり」「心づくり」「関係づくり」をVセンターの大きな目標として捉えているが、まずは住民一人ひとりの意識を変えていくことが必要と、多様な人材育成講座を実施してきた。

平成13年に開催した「生き生き活動実践塾」(以下、実践塾)もその一つだが、これまでの養成講座が課題別に行われてきたのに対し、受講者自らが課題を発見し、主体的な活動へとつなげていく講座となっている。

実践塾に集まった受講生は約70名。それぞれが課題を出し合う中で、仲間づくりをし、「地域の助け合い」や「子育て」「バリアフリー」「里山環境づくり」「インターネットを使っの情報発信を」など多彩な分野のテーマに分かれ、ワーキンググループが誕生した。また、グループ立ち上げに際して、広く地域の中に協働



実践に向けての企画書づくり(実践塾)

の呼びかけを展開したことで、現在6グループ310人余が生き生きと活動し、住民が主体的にまちづくりに参加する機運が生まれている。

### 実践塾でのコーディネートのポイント

- ・受講者が発見した地域課題を、自分自身の問題として捉えられるよう時間をかけて話し合う。また、個の課題(ニーズ)に対し、違いを認めたくえで共通点を見出し、仲間づくりを進めていく。
- ・グループが生まれ活動がスタートすると、次は地域の資源といかにつながっていくか。Vコーディネーターは地域内外の資源を把握し、必要に応じた情報提供をすることが大切で、そのためにも、日頃からコーディネーター自身が積極的に地域に出て、関係機関との連携を進めるための体制づくりをしておくこと。



お茶のみ会で「桜もち」づくり(憩いの場)



#### 住民の生活全般を支援するボランティアセンターをめざしたい

辰野町社会福祉協議会 辰野町ボランティアセンター  
ボランティアコーディネーター 福島明美さん

地域の身近な拠点として、本Vセンターには様々な相談が寄せられてきます。その中で、個々の周辺で気軽集える「いいの場」「やすらぎの場」の必要性を感じます。

現在、町内には大きなサロンが3つありますが、小さいながらも、子どもからお年寄り、障害のある人もない人も男女問わず気軽に参加できるミニサロンづくりに向け、研究・検討中です。昨年から、知らず知らずにこうした活動に取り組んでいる町内のグループを、V情報誌等で紹介し始めました。

平成13年度に実施した「実践塾」では、若者から70代まで世代を超えた受講者が集まる中で、予想外に男性の参加が多く、「心豊かなまちづくり」への関心が地域に広く浸透しているものと実感しました。今年度は、新たな人材の養成はもちろん、「ミニサロンの立ち上げ」と、V・市民活動グループの「拠点づくり」を意識したコーディネートを考えています。

辰野町では現在、多様な分野に及ぶ115のV・市民活動団体が活動を行っていますが、私たちVコーディネーターは常に地域の情報に対して「アンテナ」を張り巡らし、「個」の活動から「面」の活動へとつなげていくことが求められます。そのためにも、住民の生活全般を支援するのがVセンターの機能であるという視点に立ち、どんなニーズにも一緒に考え、お互いの共通点を見出しながら「協働」へと結びつけていければと思います。

# ボランティアセンターは「夢」を与える場

ボランティアセンターがボランティア・市民活動センターへ生まれ変わるためには、社協職員やボランティアコーディネーターはどのような心構えをし、どのような支援を心がけていく必要があるのでしょうか。

上野谷加代子 桃山学院大学社会学部教授(大阪府ボランティア・市民活動センター運営委員長)にお話を伺い、市民活動センターに向けてのポイントと、前ページで紹介した2つの事例の評価についてまとめました。

## 市民活動センターへ向けての3つのポイント

### 1 「Vセンターは夢を与える場」。あらためて原点を確認する

Vセンターの業務とは、V活動への参加意欲を引き出す・高める・活かし合うことで、活動者の自己実現を支援することと、市民が抱える課題を解決することであり、この2つの支援を社会の場で、信頼関係と約束(ルール)に基づいて行うものである。

しかし、例えば「豊かなまちづくり」に見られるように、V個人や単独のVグループだけでは解決できない課題へと社会状況が変化する中で、もはやこれまでの「需給調整型」のVセンター機能では対応できなくなりつつある。

一方、阪神・淡路大震災時に駆けつけたボランティアの姿を通して、被災地の方々をはじめ全国の人々が勇気づけられたように、V・市民活動の本質とは当事者や活動者だけでなく、市民一人ひとりに「勇気」を与え、それが地域に生きることへの「安心感」や「夢」につながる可能性を秘めていることである。

Vセンターの役割とはまさに、魅力ある・活力ある活動事例(物語)を住民(観客)に見せる場であることを、Vセンター職員やVコーディネーターは、あらためて認識しておくことが大切である。

### 2 Vセンター機能を活かして、協働の仕組みづくりを進める

それぞれの地域の中では、様々な人々が個人やグループで多様なV・市民活動を展開しているが、実は多くの活動者から交流やネットワークを望む声が、寄せられ始めている。

こうした市民のニーズに応え、より多面的な課題解決に向けた取り組みが求められる中、Vセンターは全国市区町村のネットワークと公共的立場を活かして、「協働の仕組みづくり」を進め、重層的なコーディネートを行っていく必要がある。

### 3 市民活動センターの第一歩は「一緒に考える」

そもそも「福祉」とは、市民一人ひとりが幸せや喜びを感じられるように、住民の様々な生活課題の改善に取り組むことである。したがってVセンターは、多様な分野の人々と重層的に支え合うという観点に立ち、民間団体や住民の主体性を活かしながら、多彩な取り組みへの支援が求められる。

そのためにもVセンターは、住民にとって気軽に・身近に立ち寄れる存在として間口を広げていくことが大切で、どのような分野からのニーズであっても、「一緒に考える」という姿勢が必要である。



#### 海南町も辰野町も、元気や勇気をくれる取り組みです

桃山学院大学社会学部教授 上野谷加代子さん

海南町・辰野町に共通しているのが、「日常生活で起きている事柄」を取り上げていること。また、「びっくり箱」では子どもたちの喜びを、「実践塾」では住民の想いをそれぞれ活動につなげるという「物語」があります。このように、まちづくりを地域の中で広げていくためには、人々の心を捉える物語があるかどうか非常に重要で、実は地域住民の身近な日常生活の中にこそこうした物語が潜んでいるのです。

次に「課題の明確化と共有」が挙げられますが、海南町の場合は、座談会やアンケートを実施することを通して、辰野町の場合は受講者自らが課題を発見する手法をとるなど、そのプロセスに丁寧な工夫が見られます。一方で、この作業はとても手間がかかるものですが、どちらも「ボランティアが主体性を発揮する」ための支援に徹していて、地域の皆さんがこの意気を感じて参加している様子が想像されます。

個人にしる団体にしろ、それぞれが想いをもってV活動や市民活動を行っています。まちづくりでは、「協働」の取り組みが不可欠ですが、そのためには、個々の役割や価値を地域に出し、地域社会で認知し直したうえで自らの役割を担うという作業を繰り返すことが必要です。その意味で、2つの事例が広がりを持ち得たというのは、この作業が充分に行われていたからだと思います。

そして何より、地域の皆さんに「元気」や「勇気」を与えている取り組みであること。また、Vセンター職員はじめ活動者自らが楽しんで活動を行っていることが素晴らしい。今後、夢や元気を求めて多くの市民が地域に出てくる中で、Vセンターが「市民活動センター」と生まれ変わり、市民にとって新たな可能性の場となっていくことを期待しています。

# 施設でのボランティア受け入れのポイント

## 福祉・介護関連施設におけるボランティア受け入れマニュアルより

福祉施設では、これまでV受け入れに対し、各施設によって考え方や受け入れ方法に相違がみられていました。しかし、福祉や福祉施設に対する関心の高まりや、福祉制度改革による福祉施設の機能とあり方の変化、福祉施設利用者の意識の変化などから、福祉施設とボランティアの関係を見直す動きが高まっています。

また、平成14年度から施行される「総合的な学習の時間」などにもない、体験学習へのニーズが増えることも予想されます。

今回の特集は、このほど全国ボランティア活動振興センターがまとめた「福祉・介護関連施設におけるボランティア受け入れマニュアル」のポイントをフローチャートでまとめました。

施設VコーディネーターあるいはV担当者みなさん、ぜひ参考してみてください。

## ボランティア受け入れの意味

施設にとってボランティアとは何か、市民はなぜV活動をするのか、その意味を明らかにしておくことが両者の関係を良好で有効なものにするうえで重要です。

そのうえで、施設として地域住民やボランティアをどのように受け入れ、どのような関係をつくりだしてか、という基本的な理念を立て、体制づくりを整えることが大切です。

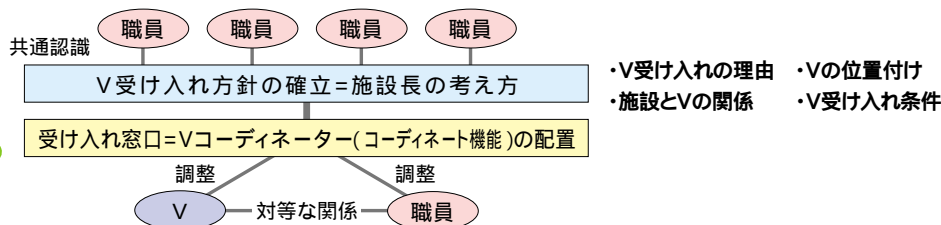
### 施設にとっての意味

- ・施設や利用者理解の促進
- ・地域社会との架け橋
- ・サービスの質・量の拡充
- ・オンブズマン機能・住民参加

### ボランティアにとっての意味

- ・社会貢献
- ・施設・サービスに対する理解の促進
- ・技術習得・資格取得
- ・体験学習

### < ボランティア受け入れ体制 >



### 主なポイント

- ・施設とボランティアの間に良好で生産的な関係を維持してくためにも、両者の間に誤解や不満が残らないよう常に調整を行い、お互いの働きを認め合えるような援助が必要です。
- ・ボランティアは利用者の意思を尊重し、プライバシーを守る意識と方法が必要。また、利用者が嫌なことは「ノー」と言えることが大切です。実習やボランティアが関わることにに対する承諾書を取り入れるなど、利用者の権利を保障することも一つの方法です。
- ・施設はボランティアを受身的に受け入れるだけでなく、ボランティアの意識を高めるなど、社会資源としてのマンパワー養成の視点からボランティアを支援する役割を担うことも大切です。

## ボランティアを受け入れる際のコーディネート

ボランティアを受け入れるのは、施設長やV担当職員だけではなく、ボランティアを受け入れる意味・意義を「施設全体=職員全員」が認識していることが求められます。実際に受け入れを進めていく場合には、職員それぞれの役割を明確にしたうえで、ボランティアが活動しやすい環境を整えることが必要です。

### V受け入れの体制づくり

|                    |                                             |
|--------------------|---------------------------------------------|
| ・役割分担              | ・施設長、Vコーディネーター、各現場職員それぞれの役割分担を決める。          |
| ・Vコーディネーターの設置      | ・Vコーディネーターが、Vプログラムに責任をもって関わることでできる体制づくりを進める |
| ・Vコーディネーターの配置と位置付け | ・兼任にする、あるいは、非常勤のVコーディネーターを採用する。             |

## 地域・学校との関わり

施設は、利用者にとっても住民にとっても、地域との関わりを持ちながら暮らすことを支援する「地域の中の施設」でなければなりません。そのためには、施設の持つ特性を地域社会へ発揮していくとともに、地域の持つ特性を施設へ活用していくことが求められます。

また、平成14年度より「総合的な学習の時間」が施行されるにともない、体験学習の受け入れの機会も増えるでしょう。子どもたち、利用者にとって相互に良い活動としていくためにも、受け入れの準備を進めていくことが大切です。

### 主なポイント

- ・施設の特性として、スロープのついている浴槽や調理室、エレベーターなどバリアフリーに基づく設備、社会福祉士・介護福祉士などの専門職、福祉事業を展開するうえでの経験やノウハウなどが挙げられます。これら特性を地域の社会資源と考え、住民とのふれあい拠点として、新たなネットワークを広げていくことが大切です。
- ・学校の教員や施設の職員が代わっても、活動が継続できるようにするためには、地域のサポートが不可欠。社協やVセンターと連携して、地域の活動として取り組んでいく必要があるが、そのために学校、施設だけでなく、地域にとっても「V活動は大切な活動」という共通認識を形成することが重要です。

### 地域とのつながり作りのプロセス

|                |         |
|----------------|---------|
| 第1段階           | 「地域を知る」 |
| ・地域の実情や課題を把握する |         |

|                                    |                        |
|------------------------------------|------------------------|
| 第2段階                               | 「施設を知ってもらう」(施設に入ってもらう) |
| ・講演会やイベント等の開催 ・住民や利用者を対象とした各種教室の開催 |                        |
| ・教室の講師として地域のボランティアや施設職員、利用者の参加     |                        |
| ・地域グループへの会場の提供や、地域の催し物への参加・開放      |                        |

|                                    |                          |
|------------------------------------|--------------------------|
| 第3段階                               | 「利用者を知ってもらう」(施設の利用者と出会う) |
| ・各種講座の展示会を施設内で開催するなど、利用者との出会いの場を設定 |                          |

|                    |                            |
|--------------------|----------------------------|
| 第4段階               | 「ふれあい・理解を深める」(利用者に関わってもらう) |
| ・利用者とのふれあいや課題の投げかけ |                            |

|               |                  |
|---------------|------------------|
| 第5段階          | 「相互交流」(V活動のスタート) |
| ・継続的な利用者との関わり |                  |

|      |        |
|------|--------|
| 第6段階 | 「継続支援」 |
|------|--------|

### 施設も学校も相互に良い活動となるために

#### 1. 学校と話し合いをしっかりと行う

施設は、利用者のプライベートな生活の場という認識にたち、「一度に大人数の活動はふさわしくない」「利用者、施設の都合ははっきりと伝える」など、受け入れに関して学校としっかり話し合いを行うことが必要です。

#### 2. 施設としての基本姿勢を持つ

利用者や家族に説明をし、状況に応じた了解を得る。受け入れについては、施設だけではなく場合によっては地域のVセンターと協力して対応することも必要です。また、事前の打ち合わせや、反省会など子どもたちの振り返りの場をもつことも大切です。

#### 3. 施設が学校のV活動を受け入れることの意義を確認する

学校のV活動を受け入れることで、「地域の若い世代が施設に出入りする」「子どもや保護者など、施設と関わりのなかった世代や市民へのつながりが広がる」「利用者が地域に出ていく機会がつかれる」などの効果が期待できます。

### 主なポイント

- ・「研修」と「オリエンテーション」は、ボランティアの施設受け入れの重要なプロセスの一つです。オリエンでは、主に「施設の概要」や「利用者」の説明をします。また、「V活動とは何か」「ボランティアが守るべき一般的なルール」などの基礎知識については、Vセンターの研修を活用することも一つの方法です。また、ボランティアと利用者・家族の関係を保つためにも、「マニュアル」を作成しておくことが必要です。
- ・V活動中には、事故や災害のほか、ボランティアの経験不足や不注意、施設の準備不足などから起こりうる様々なリスクが考えられます。何らかの事故が起こった場合に、その影響をより軽微にするためにも、あらかじめ起こりうるリスクを予測し、可能な限りの備え(リスクマネジメント)をしておくことが大切です。
- ・施設は、利用者・家族にV受け入れに関してしっかりと説明することが重要です。説明の主旨は、(1)施設にとってのボランティアの役割や意義、(2)活動の責任は施設にある、(3)利用者と直接関わる活動について断ることができる、(4)利用者のプライバシーは侵害しない、(5)利用者が苦情や意見を自由に言えること、などが挙げられます。

前ページでは、施設におけるV受け入れとV活動に関してのフローチャートを紹介しました。  
ここでは、施設Vコーディネーター( V担当者 )として知っておいてほしい社協Vセンターの機能や協働のポイントについてまとめてみました。

## 施設と社協が協働していくために

施設と社協が協働していくためには、「住民主体の福祉コミュニティづくり=地域福祉の推進」という共通の目標を持つことが必要です。施設は福祉または介護サービスを提供するだけでなく、地域の社会資源として、住民とともに福祉のまちづくりを進めていくことも目的の一つだからです。

施設が社協と連携するための第一歩として、社協Vセンターの役割や特性を把握しておきましょう。

### 社協Vセンターの役割

#### 1 伝える役割

施設に対してボランティアの考えや意見を伝える、ボランティアに対して施設や施設利用者の考えを代弁するなど、双方向を把握し調整します。

#### 2 資質向上を図る役割

都道府県・指定都市社協では、施設Vコーディネーター養成講座を開催し、施設でのボランティア受け入れに関する理解や意見交換、マネジメント機能の資質向上を図っています。

#### 3 課題を明らかにする役割

施設でのV受け入れ状況を把握するため、調査・研究を行い、課題や問題点を明らかにします。

#### 4 情報を収集し共有化する

県内外のV情報を収集するとともに、あらゆる媒体を活用し共有します。

### 社協Vセンターの特性

#### 1 地域福祉を推進する社協にVセンターがある

社協は地域福祉を推進する団体であるため、住民主体に基づく福祉ネットワーク活動の組織化など、地域のニーズに即した事業を展開しています。

#### 2 福祉分野を中心に、地域の幅広い活動を支援している

V団体、NPOの中で、福祉・地域活動のシェアは最大であり、小地域活動やV活動、当事者活動、住民参加型在宅福祉サービス、NPOなど、地域を基盤に幅広い福祉活動を支援しています。

#### 3 活動支援のためのネットワーク・ノウハウ・資源を蓄積している

公共的組織として、地域団体、福祉関係団体、教育分野など、幅広い関係機関・団体とのネットワークがある。また、V需給調整など、Vマネジメントのノウハウを持っています。

#### 4 市町村をベースとした全国ネットワークを持つ

全ての市区町村、都道府県、全国という他の民間組織にはないネットワーク、把握力を持つV活動推進機関です。

### 施設と社協の関わりのポイント

1 住民主体のインフォーマルな活動と福祉施設のフォーマルなサービスを組み合わせることで、地域で暮らしたいという住民の要望に応えることが可能となる。

2 日常の業務の中で、お互いに顔の見える関係づくりに努めることが活動支援やフォローアップにつながる。

3 施設とボランティアとの間でトラブルが発生した場合など、社協が第三者的な立場として、お互いの意見を聞き、問題解決に向けた関わりを持つ。

4 ボランティアが誤解や相違を持ったまま活動を中止するのではなく、意見を聞ける場を設定する。

5 「ボランティア=いい人」という固定概念を取り払い、誰もがV活動に参画していることを理解するなど、ボランティアに関する情報交換を行う。

6 施設の体験の場と社協の地域福祉推進の考えがリンクすることで、より先駆的・効果的な事業展開に結びつくことができる。

### ● マニュアルの作成委員長にお話を伺いました ●



#### 施設とボランティア、社協がつながることで、地域全体の福祉が高まります

広島文教女子大学 人間科学部 人間福祉学科教授 <sup>えびえ</sup> 蛸江紀雄さん

施設においてボランティアの積極的な受け入れが求められています。その背景には、福祉への関心が住民の生活感覚として高まってきたこと。また例えば、福祉関連の資格取得の際に、施設での実習が義務づけられたことや、学校教育での「総合的な学習の時間」施行に見られるように、社会の仕組みの変化が挙げられます。

こうした変化に伴い、施設も地域の資源として、地域の暮らしとつながった施設サービスが求められ、施設利用者の生活の質を高めるためには、ボランティアの参加・協力が不可欠になってきました。

施設とボランティアが相互にプラスの関係であるためには、ボランティアが施設に来る甲斐を感じてもらえるような仕組みづくりを進めること。

そして、双方の活動を

意味あるものにしていこうために、施設全体がボランティアの意味を理解した上で受け入れ体制を整備することが大切です。

また、今まで地域とのつながりのなかった施設では、V募集の方法がわからない。「コストのためのボランティアでは?」と誤解されるのが不安で、V募集を遠慮していた施設もあります。そんな場面で、両者に対し客観的に接することができる社協が仲介役や調整役を担ってくださると大変助かります。

そして何より、施設・ボランティアそして社協の三者がつながることで、お互いの活動が地域福祉を促進する活動にまで広がっていく効果も期待できます。有効な関係をつくり出すために、コーディネーターのみなさんにはぜひ頑張ってくださいと思います。

# 子どもたちの福祉活動を応援する人材を育てよう！

## 「福祉学習サポーター講座」の事例紹介

新教育課程、学校週5日制の導入にともない、子どもたちがV活動に参加する機会が増えてきました。今後、子どもたちが地域や学校で福祉について学ぶためにも、それを応援する地域の人々の存在が重要になってきます。

そこで今回の特集は、現在社協が取り組んでいる「福祉学習サポーター講座」の事例を取り上げ、プログラム内容を紹介するとともに、子どもたちが福祉について学ぶことを応援するための地域全体としての人づくりとサポート体制等についてまとめてみました。

### 1年間を通して実施する 本格プログラム

福祉学習サポーター養成講座  
(福井県勝山市社会福祉協議会)

#### 福祉教育サポーターとなる人材を育てたい

勝山市社協では19年前より、福祉教育指導員という制度を設け、市内の小・中・高等学校において手話や点字、アイマスク等の体験学習を行ってきた。また、子どもたちが参加できる地域のイベントを実施するなど、福祉のまちづくりに向けた取り組みも積極的に行っている。

総合的な学習の時間が始まり、福祉学習に取り組む学校がこれまで以上に増えてくる中で、子どもたちの学習の成果を、生活の場や日常的な活動・実践につなげていくためには、福祉教育指導員の後継者を育てていく必要性が高まってきた。

そこで昨年、民生委員・児童委員やV連絡協議会、教育委員会、当事者団体、行政など地域の様々な団体に福祉教育への理解を求め、委員会を結成。「幅広く福祉の心をもつリーダーを、市民やボランティアの中から掘り起こし養成する」ことを目的に、社協と市民の協働による「福祉学習サポーター養成講座」が平成14年1月にスタートした。

#### 地域の様々な機関・団体から受講参加

同講座は、講義・実習・グループワークを中心としたカリキュラムで、前期(1月～3月/全6回)、中期(5月～7月/全6回)、後期(8～9月/全4回)に分かれている。また、委員会を通じて受講の呼びかけを行ったことで、ボランティアや民生委員・児童委員、障害当事者・団体、教員など地域の福祉・教育に関わる様々な人材が集まるとともに、定員を大幅に上回る48名の参加となった。

ここでは、既に実施された前期講座のプログラムを紹介する。



#### 受講者が自主的な運営を 始めています

勝山市社会福祉協議会 前事務局長 川村英夫さん

講座当初は、慣れないグループワークにみなさん戸惑っていましたが、現在は受講者自身で運営委員を選出し、体験先の施設に直接連絡を入れることもあるなど、自主的な運営へと発展しています。講座を通しての変化として、「幅広い福祉観をもてるようになった」ことがありますが、こうした自発性やグループとしての活動意欲こそサ

ポーターとして大切な要素だと思います。

現在は、「子どもについて知る・考えてみる」「福祉制度とサービスの状況を知る、福祉の支え合いを知る・考えてみる」をテーマとする中期講座がすでに進行中です。グループワークでは今後の地域福祉をにらんで、ネットワークの強化を意識しつつ、「福祉学習プログラムを実際に考える」後期講座へとつなげていく予定です。

サポーターと社協の協働についてはこれからの検討課題ですが、福祉学習の受け皿となる人材の育成をめざして今後も学習を進めていきたいと考えています。

#### 前期プログラム

##### 福祉について考える

| 回    | 日時(毎土曜日)                        | 内 容                                                                                                                                                                                                         |
|------|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1回  | 1/12 13:30～14:00<br>14:00～16:00 | 開講式・オリエンテーション<br>グループワーク<br>「福祉についてイメージを出し合う」                                                                                                                                                               |
|      |                                 | →日常生活の中で自分自身の福祉観について話し合いました。<br><br>それぞれの福祉観を語り合いました                                                                     |
| 第2回  | 1/26 13:30～15:30                | グループワーク「私が会った人について語り合う」<br>→これまでの活動を通して出会った印象に残った人について話し合いました。                                                                                                                                              |
| 第3回  | 2/9 13:30～16:30                 | グループワーク「いろいろな人の人生に触れる」<br>→今までもっていたイメージとの違いに気づきました。                                                                                                                                                         |
| 第4回  | 2/23 13:30～15:30                | グループワーク「スティグマを考える」<br><br>→言葉による差別的なひびきや不快感について考えました。<br>衣装を着て、アメリカ社会での偏見を表現しました                                        |
| オープン | 2/28 18:30～20:30                | 特別講義「福祉学習サポーターに求められる役割」<br>講師:原田正樹氏(東京国際大学専任講師)                                                                                                                                                             |
| 第5回  | 3/9 13:30～15:30                 | グループワーク「共生について考える」<br>→自分とは異なる価値観、生活背景をもつ人をいかに理解し、共に生きていくかについて話し合いました。                                                                                                                                      |
| 第6回  | 3/23 13:30～16:30                | まとめ「自分なりに福祉を表現してみる」<br>→6回の講座を受け、福祉についてどのように考えられるようになったかを整理。<br>グループごとに、自分たちが考える「福祉サポート計画」を立ててみました。<br><br>福祉サポート計画の一例 |

#### プログラム

| 回   | 日時(毎土曜日)         | 内 容                                                                                                                                                                                                                                 |
|-----|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1回 | 1/26 9:30～11:30  | 「ボランティアって何?」<br>～様々なボランティア活動を知ろう～<br>(講師:豊北町社協事務局長)<br><br>→同町では初めての「ボランティアとは何か」についての講演。受講者全員が熱心に聞き入っていました。<br>初めての講演に受講者も真剣そのもの                 |
|     |                  |                                                                                                                                                                                                                                     |
| 第2回 | 2/2 10:00～11:30  | 「子どもを理解しよう」<br>～子どもに接するときに気を付けること～<br>(講師:小学校校長)<br>→言葉がけやその方法・言葉の大切さがテーマのワーク。<br>「実際に子どもたちと活動する際に、どのように接したらよいか」をみんなで学びました。                                                                                                         |
| 第3回 | 2/9 10:00～16:00  | 「子どもたちと一緒に活動してみよう」<br>～子どもとふれあいを!～<br>→子どもボランティア(小学生12名)と一緒に体験学習。受講者と子どもがグループに分かれ、ガラス工房でのアクセサリーづくりなどを楽しみました。<br><br>初めての交流体験でしたが、子どもも大人も楽しみました |
| 第4回 | 2/16 10:00～11:40 | 「活動を振り返ってみよう」<br>～先輩の話を聞いてみよう～<br>(講師:Vグループ代表)<br>→実際に子ども支援のV活動を行っている方のお話しを通して、活動の留意点を学びました。また、受講者全員がこれまでの振り返りをし、講師からアドバイスも。                                                                                                        |



#### 今後の地域の変化が楽しみです

豊田町社会福祉協議会  
地域福祉係ボランティアコーナー  
ボランティアコーディネーター 竹永和江さん

当初はリーダー養成も視野に入れて企画を進めた本講座でしたが、「小さな町で専門的なことをするよりも、小地域らしい活動を地域住民が行う方が大切では」という検討委員からのご意見もあり、「導入部分」としての講座へと変更しました。講座には、福祉やボランティアに関心をもつ一般住民20名が参加し、うち19名が「とよたつ子サ

ポーター」として活躍しています。

具体的には、当社協で昨年11月から取り組んでいる「子どもボランティア」への参加協力。この取り組みは、地域の小学生たちが集まり、収集活動や自然体験などを行うもので、毎月1回実施。本年度は「福祉マップづくり」を計画しているので、サポーターの皆さんにはぜひ子どもたちを引っばっていただけるものと期待しています。ほかに、社協や公民館で開催する「子ども教室」に協力していただく予定もあるなど、サポーターが子どもと共に進める活動を展開することで、地域がどのように変化していくのか私たちも大いに楽しみにしています。

### 地域の誰もが参加できる 導入的なプログラム

とよたつ子サポーター養成講座  
(山口県豊田町社会福祉協議会)

#### 委員の意見をもとに講座内容を変更

豊田町社協では、平成11年度より「ふれあいのまちづくり事業」の指定を受け、様々な地域福祉活動に取り組んできた。そんななか、同事業の専門部会などにおいて「次代を担う子どもたちへの福祉教育の必要性」と、学校週5日制完全実施を前に、「地域がいかに子どもたちの受け皿となるべきか」が検討課題となっていた。

そこで昨年、「地域の福祉活動を担うリーダーを」と養成講座を企画。地域の福祉・教育関係機関・団体等の代表からなる委員会と講座の内容を検討するなかで、「最初から専門的な講座にしては、参加者が集まりにくいのでは」「既存のV講座にはない、若年層や多様な人材を集めたい」との意見によって軌道修正。

こうして、地域の誰もが気軽に参加でき、サポーター養成の導入を担うことを目的とする、同講座がスタートした。

#### 子どもと一緒に地域づくり

受講の募集に関しては、「和気あいあい」とした雰囲気にしたというの思いから定員を20名とし、チラシを活用して広く一般の住民に呼びかけた。また、検討委員会に参画している公民館や民生委員・児童委員からの参加もあるなど、20才代から80才代までの幅広い年齢層の受講者が集まった。

受講者の中には、「V活動の経験のない方」や「子どもたちとの接し方が分からない方」もいたが、「講座をきっかけに、地域への関心が高まった」との意見も出るなど、「子どもたちと一緒に行う地域づくりのボランティア」としてこれからの活躍が期待されている。

# あなたのまちの福祉学習サポーターを育てよう!

実際にあなたの地域でも福祉学習サポーターを育ててみませんか。  
ここでは、あらためて福祉学習サポーターの役割について考えるとともに、  
講座のねらいと実施する際の留意点をポイントでまとめてみました。

## 福祉学習サポーターの役割ってなに？

### 1. 一市民の立場で福祉理解を広げる

福祉活動やV活動など、それぞれの活動フィールドを通して、「一住民・一市民」として客観的な立場で福祉理解を広げていく人。

### 2. 自分の適性に応じて、福祉についての学びを支援する

学校での福祉教育の授業やVセンターが行う講座など、地域の

福祉学習の場に参画する。さらに、福祉教育プログラムを企画する人と協力し、住民としての生活感覚や地域の福祉課題にふれている立場から、「情報提供者」「技術指導者」「評価者」などの学習支援者、講座企画者と一緒に学習プログラムをデザイン・実施する「協同実践者」として、いろいろな人の福祉について学びを支援していく人。

## 養成講座のねらいは？

### 1. 福祉と福祉教育への理解者・応援者を地域に増やしていく

- ・「福祉を広げたい人=福祉学習サポーター」たちを発掘し、サポーター同士のつながり、活動の核となる受け皿をつくる。地域の福祉教育指導者などをはじめ、福祉教育を推進する人々のネットワークをつくる。
- ・福祉を学ぼう、福祉に関わろうという意欲をもつ人々をあたたく受け止め、支援しようという姿勢をもつ人々を増やす。

### 2. 福祉のまちづくりに参画する市民に、本格的な学習機会を提供する

- ・地域の福祉やV活動、福祉制度やシステムについての生きた知識を身につけ、市民として福祉課題をとらえる視点や、地域

の現状を批判的に受け止め、課題解決につなげていく視野を養う。

- ・多様な人に出会い、様々な現場を知ることによって、これまで自分が抱いていた福祉観やボランティアについての見方をあらため、広げていく機会になる。

### 3. 福祉学習の場に参画するための留意点を学ぶ

- ・福祉学習の場に参加し、「情報提供者」「技術指導者」「評価者」など「学習支援者」としての役割を果たす際の留意点を学ぶ。
- ・福祉学習の場において、講座企画者と一緒に学習プログラムを推進する「協同実践者」としての役割を自覚するとともに、そのための力量を身につける。

## 講座を進めるにあたっての留意点

### 1. 受講者は地域の中から幅広く

募集の対象者は、福祉学習のすそ野の広がりのために積極的に関わりたいという人々、社協の側から積極的につながりたい人々、または、ボランティア、障害当事者、民生委員・児童委員、地区社協役員など住民の福祉意識形成に影響を与える立場にあって、社協からよりよく機能してもらいたいと期待する住民などが考えられる。

### 2. 既存の講座を組み合わせたことも一つの方法

講座のプログラムは、( 1 )「福祉について考える」、( 2 )「私のまちの福祉を知る」、( 3 )「福祉学習プログラムについて考える」を主なテーマとして分け、「講義」「グループワーク」「実習」を交えて進めることが望ましい。こうした講座を本格的に行うには長期的なプログラムになると考えられるので、例えば、( 1 )は一般のVスクールや既に活動している人の研修などで、( 2 )はVアドバイザー研修で、( 3 )は新たな研修を設けるなど、既存の研修や講座を組み合わせ、それらを全て受講した人にサポーターとして活動してもらうことも一つの方法である。

### 3. 地域の多様な機関・団体と協働し、講座を実施する

サポーター講座の主旨から、市区町村においての実施が望まれる。社協が実施主体となる場合は、社協職員だけで講座を進めるのではなく、Vグループ、学校、当事者団体、公民館、民生委員・児童委員など地域の様々な機関・団体に協働を呼びかけ、委員会を組織する。委員会には、講座の方向性やプログラムの内容などの企画をはじめ、サポーターとなる人材( 受講参加する人材 )の発掘や講師としての参加など、共催で実施することが望ましい。

### 4. 地域の特性に合わせた講座内容にする

福祉に対する社会環境や住民の意識、町の規模など、地域によって違いがあるので、まずは地域の特性を見極める。そのうえで、「どのような福祉のまちをめざすのか」あるいは「自分の地域にはどのようなサポーターが必要か」を考え、そうした地域の特性に合わせた講座内容にすることが大切である。

出典:「福祉学習サポーター等養成プログラム等開発委員会」研究報告書

# 子どもの福祉教育を進めるための協働プログラム

「総合的な学習の時間」「学校週5日制」施行から2年が経過し、全国各地では様々な「福祉教育」が推進されています。福祉教育をより効果的に進めるためには、今後、地域に住む大人をはじめ、地域の様々な資源や機関・団体の協力が不可欠になってくると思われます。そこで今回の特集は、多様な人々と協働して福祉教育プログラムを実践している社会福祉協議会の事例を取り上げ、協働のシステムやプログラムのポイントを紹介します。

## 子どもも高齢者も。住民全てが主役の協働プログラム

愛知県・豊田市



うまく描けたよ!

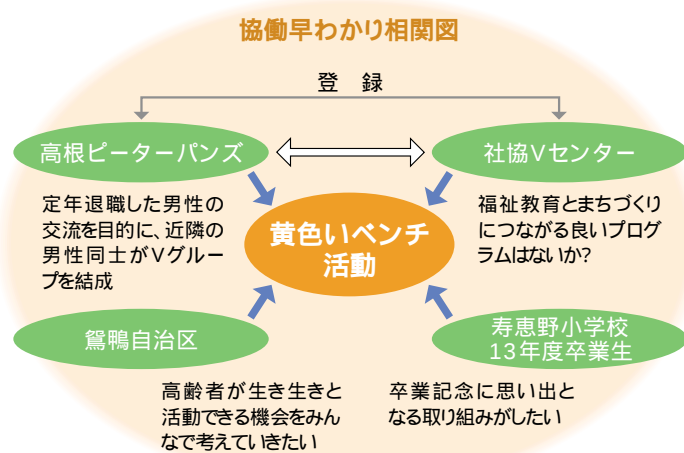
### 地域を活性化し、福祉のまちづくりを進めたい

豊田市社協では、福祉のまちづくりを進めるためにも、かつての活気が薄れた市街地をはじめとする「町の活性化」が最大の課題となっていた。一方、地域においては、5年前から商店街・自治区・トヨタ自動車労組によるVグループが協働で、地域の公園を清掃・整備したりイベントを行うなどの取り組みが行われていた。

そこで豊田市社協は、この取り組みに「子ども（小学校）」を結びつけることで、福祉教育をはじめ、男性や高齢者のV参加、ひいては地域の活性化につなげようと公園を舞台にイベントを展開。このイベントの成功をきっかけに、以後、各地域で様々な協働プログラムが展開されることとなった。

### 高齢者の休憩場所に「黄色いベンチ」を

高齢者や地域住民の休憩場所にと「U字溝」をリサイクルしベンチづくりを行う「高根ピーターパンズ」は、近隣の定年退職



者同士の交流を目的に結成された男性Vグループである。町内で「黄色いベンチ」を見かけた小学生が「卒業の記念にしたい」と、同グループと共にベンチづくりに参加。子どもたちは、メンバーが用意したU字溝に、学校生活の思い出や動植物などをペンキで描いた。記念のベンチは21個で、制作後は校内のピオトープや通学路に設置したり、保育園に寄贈した。



みなさん気軽に腰掛けてくださいな!

### プログラムのポイント

- ・狭く福祉を捉えるのではなく、「まちづくり」「地域づくり」の視点で子どもたちの体験の場を設けている。
- ・自治区(町内)の地域課題に対して、町内の学校生徒、団体・機関がプログラムに参画するなど、あくまで「地域住民が主役」の取り組みが展開されている。
- ・まずプログラムありきではなく、地域の課題と地域内の各団体・機関、学校生徒の想いやニーズにマッチングしたプログラムメニューが進められている。

## 子どもと大人が一緒に作る福祉体験プログラム

石川県・辰口町



みんなで記念撮影。写真立てに入れて、プレゼントしました!

### 福祉やボランティア活動への意識を育む「ジュニアボランティアクラブ」を結成

金沢市と小松市に挟まれた辰口町は、新興住宅が建ち並び県下で最も人口が増えている地域である。そのため、地域交流とふるさと意識を支えることが課題となる一方で、「総合的な学習の時間」「学校週5日制」の施行により、子どもたちを地域で支える基盤づくりが求められていた。そんな中、辰口町社協では昨年、小学生を対象とする「親子V講座」を実施したが、2日間の講座終了後、多くの参加者からV体験の機会を望む声があがった。

そこで、子どもたちが体験活動を通して、福祉やV活動への意識を育むことを目的とする「辰口町ジュニアボランティアクラブ」(以下、ジュニアVクラブ)を立ち上げ、子どもと大人が一緒になってプログラムを進める取り組みをスタート。昨年度は、障害者・高齢者福祉をはじめ、自然、環境、郷土文化など、年間を通して9つの体験プログラムを実施した。

なお、取り組みにあたっては、広い視野を育み、社会とのつながりを理解させるために、町内の各種団体、Vグループと多くの協働体制を取るよう工夫した。

### 「クリスマス会」では小学生も企画から参加

ジュニアVクラブは、公募で集まったA会員(町内の小学校5・6年生)とB会員(中・高・大学生・一般社会人)で構成されており、前者はプログラム体験への参加、後者はプログラムの企画・運営も担っている。現在、A会員は12名(うち男子5名)、B会員は24名(うち中学生9名、一般15名)。また、辰口町福祉V推進協議会会長や教育委員、民生委員・児童委員、V関係者からなる推進委員会を設置し、B会員および地域住民を対象に「支援ボランティア講座」を開催したり、企画アドバイスや協働のための側面支援を行っている。

昨年12月に行われた「クリスマス会」からは、A会員も企画から参加。「いきいきサロン」を訪れ、高齢者との交流を楽しむ体験プログラムだが、当日に向け歌う歌を考えたり、歌詞を書いたり。さらに「歌うだけでなく、劇も披露したい」と地域の人形劇サークルから芝居も習った。また当日には、「やってあげるだけでなく、記

念になるものを残したい」と、お別れの際に「段ボールで作った写真立て」をプレゼントした。

### プログラムのポイント

- ・1年間を通して子どもたちが様々な体験・学びができるよう、年間のプログラムの分野を明確にし、組み立てている。
- ・子どもたちの主体性・自主性を育むよう、プログラムづくりでは企画から参加している。
- ・体験後に「ふりかえり」の時間を設け、子どもと大人が一緒に感想・反省を共有し、より深い学び・理解へとつなげている。

## 学校とNPOが協働でボランティア体験プロジェクトを推進

沖縄県

「自分たちでできることは、自分たちでやり、相手を思いやる社会づくり」を目的に、「学童・生徒のボランティア活動普及事業」を実施。同事業は、県内からV活動を積極的に推進する意志のある学校を「推進校」として指定し、管内市町村社協と協力してV活動を推進していくもので、現在64校が指定を受けている。

特徴的なのは、必ずしも学校独自にプログラムを進めるのではなく、NPOや市民活動団体から広くプロジェクトを募集すること。福祉や教育に関わるNPOをはじめ、環境、自然など、昨年度は7団体のプロジェクトが選ばれたが、選出されたNPOは推進校と「お見合い」(プレゼンテーション)、互いのニーズが合えば協働でプロジェクトを推進することができる。これによって、学校は新たな福祉教育プログラムを得ることができ、NPOは事業の促進と認知につながる。そして何よりの期待は、子どもたちが地域の大人と知り合い、多様な価値観にふれるチャンスを得るとともに、地域の中で継続した取り組みへとつながる可能性も生まれることだ。



説明に聞き入る生徒たち

### プロジェクトの1例

| プロジェクト名                | 地域における障害者介助とバリアフリーチェック                                                                                                                                             |
|------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 内容                     | 地域で暮らす障害者と一緒に校区内で車いす・アイマスク体験等を行う。また、車いす介助や視覚障害者の誘導方法の基本を学ぶとともに、バリアフリーチェックを行い、実的な介助体験と障害者の視点から見たやさしい地域のあり方への気づきを学ぶ。                                                 |
| 期待する効果                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・バリアフリーへの理解を深める</li> <li>・地域の障害者の現状を知り、身近な環境について考える力を培う</li> <li>・日常的な障害者や高齢者のお手伝い</li> <li>・相手の立場にたって物事を考える力を得る</li> </ul> |
| 協働NPO・市民活動団体:沖縄福祉教育研究所 |                                                                                                                                                                    |

- 「学校から地域へと福祉教育が広がる中で、これからの社協に求められる支援とは何か？」
- 「福祉教育をより効果的に推進していくために留意することは？」
- 東京国際大学の原田正樹助教授にお話をうかがい、今後の福祉教育についてポイントをまとめました。

## いま求められている 機能と役割

### 「社協と学校」から「地域と学校」を つなげるコーディネートへ

福祉教育を推進するにあたって、これまでのコーディネートは「社協と学校がいかにつながるか」であった。しかし、「総合的な学習の時間」が導入され福祉教育に関心をもつ学校が増える中で、一つの社協が複数の学校や、学年に対してきめ細かい関わりをもつことが困難になってきている。

一方、地域の中にはすでに学校と直接関わり始めているVグループ・市民活動団体や施設、当事者グループ等も現れており、この動きは今後も増えていくだろう。市区町村社協は今後、「地域と学校」をいかにつなげ、そのためにどのような支援を行っていくかが求められる。

### 「紹介型」から「ミッション提案型」の社協へ

地域と学校をコーディネートする際に留意したいのは、単に「施設を探す」「人を紹介する」だけではなく、福祉教育を通して子どもたちに「何を伝えるのか」=「ミッション」を提案できる社協であること。例えば単に車いすやアイマスクの疑似体験だけで終わらせずに、障害者の暮らしや生き方、町のバリアフリーなどに触れながら「豊かな町とは何か」とつなげていく。こうした「共に生きるまちづくり」の視点から福祉教育を行うことこそ、市区町村社協が担うべき役割となってくる。

## より効果的な福祉教育を 進めるためのポイント

### 地域の中の「サポーター」と連携する

子どもたちが地域で学んでいくためには、いろいろな課題もある。福祉教育に関わる機関や関係者の間で共通理解を進めたり、プログラムの開発、危機管理をしていくことも必要である。

そこで、地域の中で新たな「サポーター」を育てたり、発掘・連携することが重要となってくる。一つは「福祉学習サポーター」で、単に手話や点字を教えるだけでなく、子どもや学校の現状、社会福祉全体を理解したうえで自らも福祉を学びながらミッションを伝えることができる人。もう一つは、「教育に関わるNPO・市民団体」をはじめ、企業や労働組合、高齢者クラブや当事者グループなど、従来あまり関わりのなかった既存の団体と連携し、福祉教育のサポーターとして連携することが大切。

### ミッションを共有化し、協同実践へ

地域のサポーターとともに福祉教育を進める際には、「ミッションを共有化」しておくこと。教員には教員の想いがあれば、地域

の人たちにも子どもたちに伝えたい想いがあるはずで、それぞれの想いを共有しておかないと、かえって子どもが混乱してしまう。その意味で、プログラムを作っていく過程を大事にする視点が重要となってくる。

一方で、教員、ボランティア、施設や市民団体などはそれぞれ違う役割をもっている。それらがみな同じ立場にたたなくても、「できること」を活かし「できる時に」関わり合いながらプログラムを推進していく。この「協同実践」を行える体制を育てていくことも大切。

### 子どもたちには評価の多様性を

「協同実践」で期待できる効果としてあげられるのが「評価の多様性」。子どもたちにとって今までは学校、あるいは家庭からの評価だったものが、地域のいろいろな人たちと関わることで、これまでとは違った視点から評価されたり、一緒に学びを分かち合うことができる。

その際に注意しておきたいのは、「できる・できない」で子どもたちを評価しないこと。地域そのものが学校化してしまっは子どもたちは今まで以上にいき苦しくなってしまう。あくまで地域は、社会にはいろいろな見方や価値観があるという多様性を学ぶ場であることが大切である。

### リアリティあるプログラムで 協同実践を！



東京国際大学・人間社会学部 助教授  
(日本福祉教育・ボランティア学習学会 事務局長)  
**原田正樹さん**

福祉教育への関心が高まる中で、市区町村社協は、これまでのような学校の内だけの福祉教育ではなく、地域福祉に福祉教育がつながっていく・広がっていくという視点からコーディネートしていくことが求められています。

一方、子どもたちに「障害者は大変だよ」と伝えても、直接「現実課題」に触れないことには彼らの心は動かないものです。実際に障害当事者が子どもと関わる機会をつくることによって、初めて社会の良い面や悪い面が「リアリティ」をもって子どもたちに伝わることを考えると、地域と子どもたちをつなげることがいかに大切かわかります。

今回の特集事例でも紹介されていますが、豊田市や辰口町のようにそれぞれ立場の違う地域の大人を巻き込んでいく、あるいは沖縄県のように学校とNPOをつなげていく。今後、こうした「コラボレーション(協同)」への動きがさらに広がり、社協がその「橋渡し役」となっていくことを期待しています。